大連理工大学図書館館長、教授　楊海天（訪日団団長）

「第４回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想文

日本財団の助成と日本科学協会の招請を受け、中国国際友好連絡会の参加と指導の下「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」一行 27 人は 2006 年 12 月 4 日～12 月 11 日に日本を訪問し、視察と交流を行った。訪日団は日本に 8 日間滞在した。その間に東京、沖縄、大阪、京都、奈良等地域を訪問し、日本財団と日本科学協会を表敬訪問した。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の業務委託先である株式会社ヤマタネを視察し、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館と国立国会図書館を見学した。日本科学協会の細かい手配により、訪日は順調に終了し、所期の成果を得た。今回の訪日は実に実り豊かなものであり、非常に良い体験だった。これは訪日団全員の共同認識であった。

1.　訪日の概要

（1）日本財団と日本科学協会最高責任者への表敬訪問

日本に到着した翌日の 12 月 5 日に訪日団は、日本財団と日本科学協会最高責任者を表敬訪問した。笹川陽平日本財団会長は、多忙中にも拘わらず、訪日団と会見してくれた。三浦一郎日本財団常務理事、濱田隆士日本科学協会理事長、梶原義明日本科学協会常務理事らも、訪日団と会見された。笹川陽平会長は「隣国と友好的に付き合うことは、共に努力していくべきことである。『教育・研究図書有効活用プロジェクト』の継続発展こそ、貴重で意義のあることである。日本財団は、様々な形で中国の経済発展を支援していく。」と述べられた。濱田隆士日本科学協会理事長は、訪日団を歓迎し、『教育・研究図書有効活用プロジェクト』が更なる成果を収めることを期待する。」と述べられた。また、笹川陽平会長と濱田隆士理事長は、「中日双方の友情を深め、中日両国民の相互理解を深化し、日本滞在中に日本のことをより多く理解してほしい。」と述べられた。

訪日団を代表して私は、日本財団と日本科学協会が、長年来、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を通じ、中国の大学と中国の教育事業を支援していることに対して心から感謝し、また、今回の日本訪問についても日本財団の助成金と日本科学協会の招請及び訪日日程の手配等について感謝の意を表した。

(2)「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の業務委託先の見学

訪日団は、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の業務委託先である株式会社ヤマタネを見学した。株式会社ヤマタネへ向かう途中、日本科学協会の担当者は、訪日団に株式会社ヤマタネにおける具体的な作業手順及び「教育・研究図書有効活用プロジェクト」における役割を説明した。株式会社ヤマタネは利益が低く公益性の高い事業をしているとの説明を受けた時、株式会社ヤマタネの中日協力事業への支援に対する敬意が訪日団の心の中に沸いた。日本全国から集められた図書が株式会社ヤマタネに運ばれ、日本側のスタッフ達がそれらの分類、整理、登録を行い、中国の各大学からの要望に従い、更に仕訳し、梱包するという全過程を視察した。株式会社ヤマタネの図書保管倉庫に入った団員達は、とても興奮していた。自分達

の大学に送る寄贈図書の箱を見つけ、大学名のラベルが貼ってある箱の前で記念撮影をした。訪日団は、株式会社ヤマタネの責任者や社員達の労働について心から感謝したいと感じた。

日本科学協会のスタッフは、図書寄贈の流れについて説明した。彼らは、中国の大学図書館から寄せられた和文図書に関する要望に基づき、図書の提供を呼びかけている。図書の提供を受けると、委託する倉庫を選んでそれらを入庫させる。図書の整理・選択、リストの作成を行い、寄贈予定図書のリストを中国の大学図書館へ送信する。また、返信されてきた要望に従って図書を配分して梱包、輸送等を行う。これら全ての過程において日本科学協会のスタッフ、図書提供者、倉庫作業員が多大な労力を投入している。また、日本財団は、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」のために、輸送費と倉庫保管費等を含めて巨額な助成金を拠出している。特に、感動的に思ったことは、日本科学協会のスタッフが中国の大学図書館の要望に従って図書を一冊一冊厳しく選び、検査しているとういうことである。視察を通じて 24 の大学図書館担当者は、寄贈図書の大切さを理解した。帰国後、全ての訪日団員は、「これらの図書を大切し、日本財団と日本科学協会に必ず恩返しをしたい。必要に応じて必要な図書を選び、掲示・宣伝し、これらの図書がより多くの読者に活用されるようにしたい。」と表明した。

(3) 4 大学図書館及び国立国会図書館の訪問見学と図書館間の交流

訪日団員 27 名のうち、22 名が中国の大学図書館の責任者、或いは館員である。従って、皆が日本の大学図書館について濃厚な興味を持っていた。日本科学協会と日本女子大学田中功教授は、訪日団のために日本の代表的な図書館である 4 つの大学図書館と国立国会図書館を選び、訪日日程に組み入れてくれた。4 大学図書館とは、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館である。4 大学図書館を訪問した時、熱烈な歓迎を受けた。各大学の学長は大学を代表して歓迎の挨拶をし、図書館館長は大学図書館の現状を説明してくれた。その後、担当者は図書館内を案内しながら図書館の蔵書、貸出状況、図書の利用状況、便利でスピディーな読者サービス等を説明し、最後に質問応答の時間を設けてくれた。国立国会図書館の担当者は、図書館の案内ビデオの後に図書館本館を案内してくれた。国立国会図書館の壮大な建築、豊富な蔵書、特に、「真理がわれらを自由にする」という理念は、とても印象的であった。

日本女子大学文学部の田中功教授は、日本の図書館情報学の分野の専門家であるが、訪日団のために「日本における大学図書館の現状と新しい取り組み」と題する原稿を用意してくれた。原稿には日本の大学図書館数、学生数、図書館の予算、図書館の資料費予算等が紹介されており、「大学図書館ネットワークと相互貸借」、「大学図書館の一般公開」、「公共学習室（Ｌearning　Commons)」、「機関リポジトリ(Institutional Repository)」等、日本の大学図書館の新しい動向が紹介されていた。

(4) 日本の歴史、文化、社会、自然についての理解と観察

「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」は、日本財団と日本科学協会の支援により、本州を離れて初めての地方訪問を行った。訪日団は、12 月 7 日～8 日に沖縄の

首里城、琉球大学、海洋公園を、12 月 9 日に大阪城天守閣を、12 月 10 日に京都の清水寺、金閣寺と奈良の東大寺、唐招提寺を見学した。訪日団は沖縄の美しい亜熱帯の風光を楽しみ、日本の歴史文化の趣深い古都京都、奈良を楽しんだ。そして、和食を味わい、独特な茶道文化を体験し、琉球舞踊を観賞した。これらを通じて訪日団は、日本の歴史、文化、社会、自然について初歩的な理解を得た。

2. 訪日団の収穫と感想

(1)「教育・研究図書有効活用プロジェクト」への理解とこの事業への協力に対する責任感

今回の訪日団は、日本科学協会が中国の受贈大学を追加した後に招聘した訪日団である。多くの団員にとって、初めての日本訪問である。この訪問により、訪日団は、日本財団、日本科学協会のこと、そして両者の事業についてより深く理解した。日本科学協会は、「科学教育と一般文化との発展に寄与することにより、世界平和と国利民福とを図ることを目的」としている。日本財団と日本科学協会は、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を非常に重視している。事業の企画から実施まで多大な労力を投入し、図書の収集、整理、配送等、各段階において多くの困難を克服してきた。事業の実施過程において日本の図書館業界、出版界、文化界等から多くの支持を得ている。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」は架け橋のように人々や社会団体をつなげ、各界における中日友好を維持して発展させる情熱と力をまとめる事業となっている。訪日団は、中日間の友好交流のために日本財団が成し遂げてきた多大な貢献を理解した。日本財団は、「教育・研究図書の有効活用事業」以外に、「笹川医学奨学金制度」、「ヤングリーダー奨学基金」、「日本語教師派遣事業」、「笹川日中友好基金」、「ハンセン病撲滅事業」、「日中両国鉄道発展事業」、「中国国際関係学ネットワーキング」等、十数件の事業を実施している。これらの事業は、科学教育と一般文化との発展に寄与し、中日間の友好交流の促進を具現している。団員達は、自らも中日両国友情を構築する一員になろうと思うようになった。

日本滞在中、団員達は日本財団と日本科学協会の最高責任者を表敬訪問し、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の協力会社である株式会社ヤマタネを視察した。日本科学協会の「教育・研究図書の有効活用事業室」のスタッフからは至れり尽くせりの配慮を受けた。これらを通じて団員達は、日本財団と日本科学協会が「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を重視していることを深く感じた。特に、株式会社ヤマタネを見学したことにより、一冊一冊の本に多くの人々の苦労や厚意が込められ、図書寄贈の過程には多くの労力が費やされているということを感じた。頭の中、そして、心の中に「教育・研究図書有効活用プロジェクト」に協力しなければならないという責任感と使命感が強くなった。団員達は、「今後、寄贈図書を十分に有効に活用するためにしっかりと協力したい。」と様々な場面で表明していた。

(2) 日本の大学図書館についての深い印象

訪日団は、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館の 3 つの私立大学図書館と国立の琉球大学図書館、さらに、国立国会図書館を訪問した。これらの図書館は団員達に深い印象を残してくれるものであり、多くの収穫と感想が得られた。

1）日本の大学図書館館舎の斬新な設計とそれぞれの特色

今回、見学した日本の私立大学図書館は、全て新しい図書館である。建物のデザインも斬新なものであった。武蔵工業大学図書館は、自然と人文を融合するという設計理念に基づいている。芝浦工業大学図書館は、白と黒の色彩を採用している。成蹊大学図書館は、ガラスと鉄鋼を完璧に結合させている。琉球大学図書館は、非常にシンプルであった。日本の大学図書館館舎の建築風格は多様である。それぞれ特色がある。館舎の造形は、既に図書館文化の重要な構成要因となっている。図書館は、読者を啓発し、読者の創造性を刺激する上で重要な役割を果たしている。

2）館舎建築の特色に応じた各図書館特有のサービス

武蔵工業大学は、心を静めて伸び伸びと学習する学習型図書館を目標としている。内装には全て木の素材を使っている。読者は、本に囲まれて至るところから本を取ることができる。閲覧席は本棚に近い。無線 LAN でネットワークに接続することができる。音楽が流れ、のんびりとした温かい雰囲気が漂う中で便利さを感じることができる。芝浦工業大学図書館のサービスの特徴は、非常に鮮明であった。訪日団のために特別に催してくれた茶道は、厳かで重々しく、優雅な雰囲気を味わうことができた。茶道と読書を融合し、心を静めて茶を楽しみ、心を静めて本を読む。その楽しさに勝るものはない。

成蹊大学図書館は、正に設計芸術の殿堂である。建物全体がガラス張りであり、透き通っていて明るい。各閲覧室の造形もそれぞれ異なり、椅子も綺麗な形をしている。正に美を楽しむものである。琉球大学図書館は、中国の大学図書館の状況に近い。発展の段階も中国の大学図書館に近い。琉球大学図書館は、琉球に関する文献をすべて収集し、それを特色としている。豊富な琉球文献の存在により、世界各地から研究者がここに集まり、ここで研究に励んでいる。

3）現代化水準が高く先進的設備の日本の大学図書館

見学した大学図書館にはネットワークの管理システムと厳しいセキュリティーシステムが整備されている。便利でスピディーな公共サービスシステム（コピー機、プリンター等のネットワーク化）、自動貸出・自動返却システム、自動転送システム、移動本棚、無人倉庫及び管理システム等がある。移動本棚と無人書庫及び管理システムは、中国国内の図書館の低利用率蔵書問題の解決にヒントを与えるものである。書庫には換気装置、音声警報装置、煙警報装置、CO2 消火システムを含む防災システム、通路の要所には緊急システムと簡潔な説明文がある。

高水準の現代化システムと設備は、読者に利便性を与え、多くの労力を省いた。これらのシステムは投資額が大きく、日本の大学図書館の高い現代化水準が反映されている。

4）業務管理の特徴

図書館業務の外部委託は、日本の図書館の中で普通に行われている。視察した4 大学図書館は、学生数と教職員数の割に正規の図書館員数と蔵書数が少ない。図書館の人員配置において効率が求められている。武蔵工業大学図書館は、図書目録の編集作業を専門の目録編集会社に、流通作業も専門の人材会社に委託している。自動貸出・自動返却システム、無人倉庫システム等の先進的技術と設備により図書館館員の作業量を大いに削減している。図書館館員は、より多くの時間と精力を相談業務等、高品質のサービス提供に集中することができる。見学した大学図書館では、通常、司書資格を有する館員が 8～9 名いるのみである。その他に学生アルバイトを多く雇っている。学生アルバイトの活用により人件費を節約すると同時に、学生に図書館を理解し、図書館を活用するチャンスを与える。学生アルバイトはそれらの情報をまた仲間達に伝え、そのことが図書館の利用率向上につながる。これらは、今後、中国の図書館管理を改善するうえで有効な事例である。

5）読者本位の濃厚味

日本の図書館の視察を通じ、「読者第一」、つまり、きめ細かなサービスの提供が日本の大学図書館の特徴であると理解した。それは、消音処理を施されたジャーナル棚、日、英、中、韓等多言語のガイドブック等である。各図書館のバリアフリー、目の不自由な読者のための音声ガイド、文献閲覧器等がある。閲覧中の読者に影響を与えないため、見学者は撮影、収録することを禁止されている。読者を尊重し、読者を守る「読者第一」の理念がよく反映されていた。

(3) その他の収穫

すべての団員にとって最も感動したことは、中日両国民の友情である。訪日団は、日本財団と日本科学協会の最高責任者を表敬訪問した。日本財団と日本科学協会は、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を非常に重視している。そして、日本財団と日本科学協会の各分野における中日間交流の強化、中日友好関係の発展、世界平和の促進への願いを身をもって体験した。訪日団が武蔵工業大学、芝浦工業大学、成蹊大学、琉球大学を訪問した際、各大学の学長を始めとする主要責任者から熱烈な歓迎を受け、日本の教育界の友好的な感情を感受した。日本科学協会のスタッフとは 8 日間接したが、訪日団への気配りと友情がよく伝わってきた。日本滞在中に行く先々で温かい友情を感じ、よそよそしさや疎遠感などは毛頭も感じられなかった。中日両国の友好関係は、中日両国の重要な利益である。日本財団と日本科学協会が中日両国間の理解強化と友誼増進を提唱することは、正に遠見卓識である。

また、訪日団は日本の歴史、文化、自然をより深く理解した。沖縄訪問を通じ、訪

日団は、辺鄙地域の経済発展と地域振興に対する日本政府の政策を知り、これを賞賛した。東京と大阪の訪問を通じ、日本の工業化の成果について深く理解した。大阪、京都、奈良の見学を通じ、日本の歴史と文化を自ら体験した。特に、日本が古跡や文化施設を保存・保護していることは、印象的であった。その他にも、訪日団の団員は皆、創意に富み、精緻な日本の製品に興味を示していた。

我々は、身をもって日本国民の勤勉さ、礼儀正さ、勤務姿勢、道徳心を感受した。これらは、日本が経済強国、高度な文明を有する社会になれた重要な理由だと理解している。一部の団員は、「中国の現代化の過程において日本の先進的理念と経験を学び、日本についての理解と認識を深めなければならない。」と話していた。

「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」が、成功裡に実り多いものであったことを団長として非常に光栄に思った。我が大連理工大学は、今年、日本科学協会の依頼を受けて中国の北部地域における受贈図書の中継大学となり、日本科学協会と受贈大学からの信頼を感じている。我々は、中継大学としての仕事に励み、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の図書の有効活用を必ず推し進めていこうと考えている。

最後に、訪日団を代表して改めて「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」を快く受け入れてくださった日本財団、日本科学協会、笹川陽平日本財団会長、濱田隆士日本科学協会理事長、梶原義明日本科学協会常務理事を始めスタッフの方々、武蔵工業大、芝浦工業大学、成蹊大学、琉球大学の学長及び図書館長、国立国会図書館に感謝すると共に訪日に便宜を図ってくれた全日空に感謝する。

2006 年 12 月 30 日

中国国際友好連絡会アジア部 副処長　馬農

「第４回中国大学図書館担当者訪日団」総括文

「中国大学図書館担当者訪日団」一行は日本科学協会の招請に応え、2006 年 12 月 4 日～12 月 11 日に日本を訪問した。中国国際友好連絡会の積極的な協力と、日本科学協会の周密な手配の上、訪日団は日本の関係先を訪問した。中日双方が実質的な効果を求め、交流を通じて「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の意義についての理解を深めた。訪日を通じて中国の大学図書館と日本の図書館同業者との交流が深まり、協力関係は強化された。訪日は実り豊なものとなり、円満に成功した。

1. 訪日概況

日本滞在中、訪日団は、日本財団の笹川陽平会長、日本財団の三浦一郎常務理事、日本科学協会の濱田隆士理事長、梶原義明常務理事を表敬訪問した。そして、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、国立国会図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館を視察し、株式会社ヤマタネ等を見学した。

2. 訪日中の具体的な内容

（1）日本財団と日本科学協会の主要責任者への表敬

訪日団が日本財団を表敬訪問した際、笹川陽平会長は次のようなことを話された。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」と「日本知識クイズ大会」は、中国の学生の日本語学習意欲を増進した。日本財団と日本科学協会は、今後ともこれらの事業を継続し、中国の学生の日本語学習意欲を更に増進する意向である。日本財団が助成している「教育・研究用図書有効活用プロジェクト」は中国の関係部門の協力と支持を得て順調に発展しており、寄贈図書もよく管理されていると聞いている。関係者の皆様に感謝する。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」は、日本の図書館、出版社、研究所、企業及び個人等から多くの協力と支持を得ており、日本全国から図書を収集して中国の大学に送っていると言えよう。この事業は国民的支持を得た友好交流事業だと言える。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」は中国で優秀な人材を育成するのに寄与し、教育分野における中日両国の交流を更に促進させるだろう。今後もできるだけ中国側の要望に応え、中国に有用な図書がより多く寄贈できるよう努力していく。

日本科学協会の濱田隆士理事長と梶原義明常務理事は、訪日団と会見した際に次のように話された。

日本科学協会が科学普及事業を実施する主な目的は、科学技術、教育分野の友好交流と協力を促進することである。日本科学協会は、日本の大学、研究機関、出版社、企業等から図書を収集して既に中国の大学に 147 万冊の図書を寄贈した。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を通じて教育等の分野における中日両国の交流と協力を更に促進するよう願っている。

（2）日本の大学図書館の見学

日本の大学図書館の見学を通して日本の図書館業の現状と発展の方向性を理解した。そして、日本の図書館建設に関する素晴らしい経験を学び、図書館分野における

中日間の差が分かった。最も深く感動を受けたのは、日本の図書館が読者第一とするサービス理念と施設の素晴らしさである。殆どの図書館は閲覧室と休憩室があり、1Fにサービスエリアを設けている。館内に椅子、机、パソコン等の設備を備え、研究用個室もある。非常に便利で実用的であり、利用しやすい。

3. 訪日団の収穫と体得

訪日団は、日本科学協会の「教育・研究図書有効活用プロジェクト」が非常に大きな意義を持つ事業だと認識している。中国の大学図書館の整備において大きな補完となっている。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」は、中国の大学において非常に大きな影響力がある。中国の大学図書館は年間予算が少ないため、外国語の図書を購入する予算は限られている。大学図書館だけでは、教師と学生の要望にはとても応えられない。「教育・研究図書有効活用プロジェクト」が提供した寄贈図書は中国の大学図書館の外国語図書不足を緩和し、大学の教師と学生の能力向上、大学の教育水準の向上に寄与した。寄贈図書には海外の先進的な科学技術や最新の社会発展状況が紹介されている。これらは教師と学生の専門水準の向上や大学の国際化に役に立っている。中国の大学からも喜ばれている。訪日を通じて「教育・研究用図書有効活用プロジェクト」の具体的な実施過程も考察し、日本の図書館同業者とは実質的な交流ができた。日本の先進的経験は必ず中国の大学図書館の国際化に役に立つだろう。

2006 年 12 月 21 日

黒龍江大学図書館 館長 王洪濱

訪日の感想

日本科学協会の招待を受け、中国大学図書館代表団が 12 月 4 日から 12 月 11 日までの 8 日間、日本を訪問して交流した。私は幸い代表団に入ることができたので、初めて日本の土を踏んだ。8 日間の交流訪問で感想は多く、収穫もかなり深いものがあった。

1. 日本の出版社、図書館、大学の収集している図書、中国大学への寄贈プロジェクトについてより深く理解し、教育研究図書の有効利用に大変参考になった。

日本到着後の初日、図書プロジェクトの各業務プロセスを参観しての交流中、図書プロジェクトの歴史や現状とその意義を深く理解できた。また、一冊一冊の寄贈書のありがたさを深く感じた。寄贈書には日本各界の寄贈者による中国の教育事業に対する関心と支持が溢れ、また日本財団、日本科学協会の多大なる人力や知力が無償で注がれていることに感動した。感動だけでは足りないと思う。私は自分の努力を通じて、図書プロジェクトをより一層健全に、持続的に発展させ、一冊一冊の寄贈書をよりよく利用できるようにしなければと思った。

2. 日本の大学図書館および国会図書館の現状がよりよく分かった。

8 日間の日本滞在中、武蔵、芝浦、成蹊の私立三大学の図書館と国立大学である琉球大学の図書館、そして国会図書館を訪問した。それぞれの特徴は深く印象に残った。

(1)建築の特徴：武蔵工業大学の木造図書館、成蹊大学のガラス図書館など、こうした建築の特徴は一つの景観にとどまらず、内部での雰囲気、環境なども同様に、読者が積極的に学習するのを促す力を持っている。国会図書館の地下 8 階、地上 4 階という建築は、地上空間の占用を減らすだけでなく、図書の保管や利用にもよい。地下書庫の天井は人を基本とする精神が十分に表れており、一目見ただけで忘れられない。

(2)サービス手段：最も感じたのは科学的、先進的、スピーディ、効率のよさ。科学的と思ったのは各館の理にかなったレイアウト。読者の利用習慣がよく考慮されている。先進的だと思ったのは使用設備。自動連絡システム、貸出と返却の自動化設備、高級シアター、電動集中書架など、館内設備の学習になった。スピーディで効率がよいと思ったのはそれらの設備の導入と、従業員の行き届いた真剣なサービスである。

(3)サービス方式：各国の大学図書館には共通点も多いが、日本の大学図書館は管理とサービス、特にサービスがよくできている。サービス品質向上のため、カウンターは民間会社に委託。他にも読者に対する制限事項が少なかったりと、読者各人の個性に基づいた学習ニーズに応えており、読者のためのサービスが実現されている。

まとめると、図書館の参観と交流を通じて、図書館業務の先進的な理念を学ぶことができた。私たちは真剣に理解し消化して、努めて業務に取り込んでゆき、自館の業務水準を高めていけると思う。

3. その他の日本に関する感想

日本に滞在していた 8 日間で、日本社会の色々な面を感じ取ることができて、印象にも残っている。中でも印象が深いのは日本国民の素質だ。日本の人口は中国の十分の一、面積は二十六分の一だが、GDP 平均は 33 倍である。この違いの根源は国民の素質によるものだと思った。

(1)優れた国民の素質は経済発展の動力である。訪問期間中、財団機関、ホテル、学校、図書館を問わず、接点のあった皆さんの仕事熱心さは忘れがたい。本当に日本人の勤労精神が経済に奇跡を起こし世界の注目を集めたのだろう。

(2)優れた国民の素質は、良好な社会秩序の基礎である。訪問中、日本人の秩序正しさをいたる時いたる所で感じた。日本の人口密度は高く、東京のそれは北京や上海を超えているが、公共施設で見かける通行人の全てが、慌ただしいながらも上品で礼儀正しく、忙しくしていてもきちんとしていた。交通の便もずっとよいが、滞りがなく秩序があって整然としており、誰も赤信号を渡ったり飛び出しをしたりしていなかった。秩序は管理の水準もだが、国民の素質をよく表している。

(3)優れた国民の素質は質の高い環境を保障してくれる。私たちは中国国内の大都市で汚染やら埃やらに慣れてしまっているが、日本の滞在中で最も感動したのは清潔さで、室内外に塵一つなかった。社会の文明性を見るにはトイレを見よとよく言うが、日本のトイレの清潔さは設備の配置もさることながら、実は人への敬意や人々の勤労精神が表れている。強調しておきたいのは、日本の清潔さはプロチームの仕事のできによるものではなく、市民の自覚によって保たれているものだということだ。この意味では、日本の人々は公共衛生を作り上げ守り続ける人々で、国民全体の衛生道徳教育が日本の清潔さの根源だと言える。

以上は今回の訪問で感じたことの本の一部である。時間が短かったため、あまり正確ではないかもしれないし、あくまで個人的な考えである。

最後に、日本財団と日本科学協会へ改めて感謝したい。私たちに今回の交流学習の機会を提供してくれたこと、親切な接待と入念な手配、特に全日程アテンドしてくださった日本科学協会の図書プロジェクト室メンバーの各位、ありがとうございました。

2006.12.20

哈爾浜（ハルビン）医科大学図書館 副館長　史興偉

訪日に関する私見

私はとても幸いなことに、第 4 回中国大学図書館担当者訪日団のメンバーとして貴国で 8 日間の参観と視察をすることができた。今はもう帰国して職場に戻っているが、日本での情景は瞼に残っており、忘れられない。8 日間の参観と視察を通しての収穫は多く、ひときわ感慨深い活動だった。

1.日本科学協会およびその寄贈図書の運用に対する理解を深めた

今回の訪問期間では、日本財団、日本科学協会および図書プロジェクトに関わるその他の機関に参観や視察をする機会があった。図書プロジェクトの組織、管理およびオペレーションについてより深く、より感覚的に認識し理解できた。私たちは心から、あなた方が中日の友好と文化交流のために切実な努力をされていることに敬服の意を表する。先進的な管理方式や業務手段には感慨を、厳格な勤務態度や競業の精神には尊敬を申し上げたい。ほかにも、とりわけ貴重な機会として私たちは笹川会長、濱田理事長などの日本財団、日本科学協会の幹部職員と身近で友好的な交流や座談会をすることができ、考えを交換して友誼を増進させられたことは、今後一層協力を深めるための良好な基礎を打ち立てた。

2.　図書館に関する多くの先進的な管理理念や方法を学んだ

武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館という 4 つの大学図書館と国会図書館という公共図書館 1 つの参観を通し、日本での図書館事業の現状や管理理念と方法、業務フローおよび図書情報理論研究など各方面が多角的だと感じた。多くの分野で中国の図書館と大きく違いがあり、感慨が深く、収穫も多かった。図書館管理の改善と整備にとても貴重な経験と参考になると思う。

3.　日本文化と中日の歴史ある交流に対してより深く知ることができた

中日両国は一衣帯水の隣接する友好国で、文化や観念など多くの分野に共通する所がある。今回の訪問を通じ、日本の社会、風情、文化、歴史といった各方面を視察し、東京や大阪を代表とする日本の現代的な国際都市の繁栄する姿を感じただけでなく、京都や奈良を代表とする日本古来の文化にも触れることができた。特に中国唐代の鑑真大師が日本に仏教を伝えたところ—唐招提寺を訪ね、中日両国の友好的な往来の歴史の長さと分けきれない文化の源とを深く体験した。

2006．12．18

中国　哈爾浜にて記す

牡丹江医学院 副院長　馮克倹

訪日の随想

私は、日本科学協会の招きによる「第四回中国図書館館長代表団」の訪日に同行し、任務を円満に終了することができました。ここに、日本科学協会が教育・研究図書有効活用プロジェクトによりなされた重要な貢献に対して感謝いたします。お招きくださった日本科学協会、日本財団の笹川陽平会長並びに日本科学協会の濱田隆理事長に直接お会いできたこと、特に、日本科学協会の梶原義明常務理事を始め職員の方々が私たち代表団の訪日期間中に大変な手配や温かい配慮をしてくださったことに感謝します。

武蔵工業大学、成蹊大学、琉球大学の図書館および国会図書館を参観した感想として３点を挙げることができます。１つは政府が図書館を重視しており、投資もしていること。２つ目は、図書館の先進的で現代的な施設と現代的な管理。３つ目は図書館職員の仕事熱心さと人間味のあるサービス。これらは、深く印象に残りました。

観光した古跡名勝や日本の風土、人情などもよく覚えています。

日本科学協会の教育・研究図書有効活用プロジェクトが継続して推進され、中日両国間の文化交流が絶えず強まり、両国民相互間の友好関係が増進されることを希望いたします。

黒龍江東方学院図書館 館長　霍燦如

訪日視察記

日本財団の助成と日本科学協会の招請を受け「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」一行 27 人は、2006 年 12 月 4 日～12 月 11 日に日本を訪問し、交流を行った。今回の訪日は中日双方が実り豊かな友好交流を行い、円満に成功した。訪日団の一員として日本の大学図書館、日本の歴史、文化、習俗、人情等を直に考察して大いに受益した。今回の交流は「教育・研究図書有効利用プロジェクト」を促進したのみならず、相互理解と友好増進の効果も得られた。今回の交流は黒龍江東方学院の今後の国際交流に良き基礎を築いた。

1.　訪日の概要

（1）日本財団、日本科学協会最高責任者への表敬

日本滞在中、日本財団と日本科学協会の高層部責任者は終始訪日団を熱烈に歓迎し、接待し、親切に接してくれた。笹川陽平日本財団会長、森田日本財団常務理事、濱田隆士日本科学協会理事長、濱田隆士先生は 1999 年から中国 24 大学に延べ 151 万冊の図書（黒龍江東方学院に 76, 221 冊）を寄贈し、中国の高等教育事業に寄与したと述べた。楊海天訪日団団長、大連理工大学教授は訪日団を代表して日本財団と日本科学協会責任者の会見について感謝を述べた。そして中国 24 大学の読者の名義にて中国の大学への教育研究用図書の寄贈についての感謝を述べた。

（2）図書館界との交流

日本滞在中、訪日団は武蔵工業大学図書館、成蹊大学図書館、芝浦工業大学図書館、琉球大学図書館と国立国会図書館を訪問した。訪問した各図書館からは図書館に関する説明を受け、館内及び各業務部門を案内してくれた。見学先々の図書館で館員と図書館業務について交流した。

（3）日本の自然、社会、歴史、文化についての実地考察

訪日団は図書倉庫を見学した。沖縄の首里城、（奈良の）東大寺、唐招提寺（鑑真寺）、（京都の）清水寺、金閣寺を見学した。日本の茶道と日本舞踊を観賞した。沖縄大自然の美景を楽しんだ。訪日の楽しさは一衣帯水の隣国の日本を更に輝いたものに見せてくれてまた日本の民族、風土、人情についてより深く理解した。

2. 訪日団の収穫と体得したこと

（1）最大な成果は相互理解と友好交流を促進したことである。皆様の周到で手細かな手配、仕事に対する謹厳さ、礼儀正しさ、そして心を込めた人との接し方を通じて中日両国人民の友好的感情をしみじみ感じた。

（2）読者第一という図書館サービス理念の体験

1）武蔵工業大学図書館

武蔵工業大学の特徴としては、すべての閲覧室と書庫の床、本棚、椅子と机が

木質で統一したことである。壁の四周には木質の本棚が置かれ、部屋の中央に木質の机と椅子が置かれている。黄と緑のランプがあり、机上にスイッチが設置されている。特別蔵書閲覧室内にはやや暗めの柔らかい明かりをつけていた。貴重な図書への輻射を防ぎ、古籍を保護するためだと説明してくれた。学生は図書カードでマルチメディア室と公共学習室の利用が予約できる。そしてそのカードで入室することができる。学生は公共学習室で討論し、マルチメディアの資料を閲覧することができる。居心地がよい。回りにどこにはパソコンが置いてあり、どこにいてもパソコンが使える。1Ｆロビーに CD 棚があり、CD 資料はすべて開架である。学生が自由に借りることができる。疲れた場合、学生たちは居心地よくソファで仮眠する。

2）成蹊大学図書館

成蹊大学図書館の特徴としては、ビル全体がガラス張りということである。図書館の 2F、3F はガラス張りのボール状部屋である。部屋には閲覧用の机と椅子、パソコンが設置されているが紙媒体の図書がない。学生の討論、研究、習作等専用の場である。外からは中の様子がはっきり見える。マルチメディアの設備、パソコン等は随所においてある。学生達はどこにいてもインターネットを通じて所用資料の検索ができる。静かで優雅な図書館環境は、先進国が読者重視と教育重視の思想を具現している。しかし中国の大学にはまだこのような図書館がない。

3）4 つの大学図書館とも館員が少ない

見学した 4 つの大学図書館には図書館員が非常に少ない。成蹊大学図書館には 8 人、すなわち館長、課長、インタビュー担当、相談員のみであった。貸出業務担当は資質が高く礼儀正しいアルバイトを雇っている。心を込めて、礼儀正しく読者に接している姿勢からは中国のホテルマンを思い出す。読者第一の理念は日本の各大学図書館で感受した。

4）参考になった 2 点

日本の大学図書館の視察を通じて 2 点が参考になった。

1 つは、各大学図書館の公共学習室（Learning Commons）である。公共学習室でパソコンの利用や、集団学習と討論ができ、絶対な静粛が要求されていない。例えば成蹊大学図書館においてこれらの空間に本棚がなく公共学習の場として提供されている。

2 つ目は、機関研究資料室（Institutional Repository）のことである。資料室は、教師と学生の研究成果を電子データとして保存し、ネットワークを通じて機関内部、或いは外部に送信する。具体的に図書館館員は教師と学生が学会誌等で発表した研究成果を大学の内部や外部に提供することである。とても有意義な学術交流活動である。

斉斉哈爾（チチハル）大学図書館　副館長　李雲発

忘れがたい旅路、友好の訪問

―中国第四回大学図書館訪問団に同行し日本を訪問した感想―

12 月４日から 11 日まで、幸いにも「第四回中国大学図書館訪日団」に参加して日本を訪れました。感想は多く、感じ取ったことは深いです。帰国して一月あまり経ちますが、日本の皆さんの厚情と手厚いもてなし、そして、日本の美しい山河は、いずれも美しい印象を残しています。

それまでは、日本というと頭にひらめくのは経済の発展、富士山と桜、新幹線の走るところでした。日本の友人が贈ってくれた図書を手に取り、日本財団も日本科学協会も知らないが、どういった組織なのだろう、寄贈された図書はどこから来たのだろう、どうして私たちに届いたのだろうなどと、探索し理解したいという気持ちで東京行きの飛行機に乗りました。

日本にいる期間、まず、私たちは横浜の寄贈図書書庫を参観し、そこで日本の皆さんの業務環境と整理され出荷を待っている図書を見ました。彼らはこの事業のために大変な苦労をし、汗水を垂らしているのだろうと想像しました。参観時間は短かったものの、忘れがたい印象が残りました。私たちの受け取る一冊一冊の本に、働く人の汗水がにじんでいることを知ったのです。

日本財団の笹川陽平会長にお会いし、会長の日中国交正常化三十周年記念大会での講演の言葉を目にして、笹川ファミリーが中日友好のためにしてきた努力は尊敬に値すると強く感じました。笹川陽平会長は以前、鄧小平、江沢民、胡錦涛といった指導者の接見し、鄧小平をして「義を重んずる人物」と言わせた方です。中国の 24 大学に百五十万冊あまりの図書を寄贈しただけでなく、広東省にはしか研究所を建設し、1000 名もの中国医師に日本での研修資金を補助し、大興安嶺の火災、安徽の水害、雲南の地震などのため熱心に募金し、自ら 600 名もの日本青年を連れて訪中……笹川親子が日中友好のために行った慈善事業や実業は、深く心に残っています。

訪問期間中、私たちは五箇所の図書館を参観しましたが、そのうち四箇所は大学図書館でした。訪問中、私たちは日本の同業の皆さんがここまで熱心に読者サービスや人間的な管理をしており、現代的な設備であることに敬服を覚えました。同業の皆さんの絶えず改善を続け仕事の細かいところを重視する働きぶりは、私たちの良いお手本となりました。また、私たちがその時に聞いた多くの質問にも親切に答えてくれました。一大学を訪れるたびに学長と館長が送迎と挨拶をしてくれて、記念撮影をしてくれました。参観交流中、私たちは多くのものを学びました。今後の業務の参考にもなります。

今回の訪問で忘れがたいものはというと、一本の傘です。訪問が始まったばかりの日に小雨が降り、私は準備不足で傘を持っていませんでした。他人の傘に入れてもらわね

ばならず、非常に不便でした。この時、日本科学協会の担当者が目に留めて、すぐに傘を買ってきてくれたのです。雪中に炭を送るという言葉がありますが、私はそうしたことを東北で経験したことはありませんでした。しかし、雨中に傘を送るということが、本当に私の目の前で起きたのです。良い人とは、人が困っているときに助けてくれる人です。この傘は日本科学協会と日本の皆さんが私たちに見せてくれた真心の証としてずっと残しておきます。

今回の訪問で最も忘れがたいことは、沖縄の暮れの海岸でのレクリエーションです。その晩は、夜の帳が下り、月明かりと街灯が砂浜を照らすなか、訪日団の一部のメンバーと日本の友人がそこに集まって、パーティーを始めるや、皆が続いて歌うわ踊るわで、高らかに響く声あり、方々の訛りもありました。その時、私は「東北二人転」をちょと歌ったのですが、歌こそ下手だったものの、「東北二人転」を日本に持ち込んだ中国人が私の前にもいたことを知りました。日本の皆さんは日本の踊りを教えてくれました。私たちも皆さんと大いにヤンコ踊りを楽しみました。砂浜の歌声は、波の音、楽しく踊る姿やうきうきした気分を伴って、夜が更けても終わりにする気にならず、ずっと帰りたくないと……。

仕事の関係で多くの国へ行ったことがありますが、日本の旅は最も印象深いもののひとつです。この訪問を通じて日本への理解が深まりました。日本科学協会職員の皆さんの真剣で責任感の強い仕事ぶりは、永久により良い寄贈図書の受け入れ業務に対するモチベーションとなるでしょう。

日本への訪問は短いものでしたが、記憶は美しいもので、多くの人や事柄が今も目の裏に映り、昨日のことのようです。

2007 年 1 月 20 日

東北林業大学図書館　副館長　張 曼玲

日本訪問の感想

2006 年 12 月 4 日から 12 月 11 日まで、私は「第四回中国大学図書館担当者訪日団」に同行し、日本へ 8 日間の訪問をしました。数日の参観により、日本財団、日本科学協会及び教育・研究図書有効活用プロジェクトの業務状況を深く理解し、日本の図書館や日本の風土、人情について浅くて広い認識を得ましたので、以下の数項目にまとめます。

1. 図書寄贈事業に対する更なる認識と理解

図書寄贈事業は日本財団が日本科学協会に資金援助をしている事業の一つで、趣旨は日本の出版社、企業、大学、研究機関、一般市民から図書の提供を受け、それを分野別に整理し、海外の大学や研究機関の需要に応じて寄贈するというもので、海外の大学や研究機関に教育や科学研究の分野で有効利用してもらうことで、双方の相互理解と友好協力を促進するというものです。

1999 年の事業開始から、日中両国の関係者の多大なる協力のもと、今までに中国の 24 大学図書館に寄贈された図書は 151 万冊余りです。今回の訪問により、日本財団、日本科学協会、この事業の関係者全員の努力や費やした労力について理解を進めることができました。寄贈図書は各界から収集してきた物とは言え、事業全体としての費用は多く、大量の資金を費やす必要があります。事業の実施中、担当者は多くのつらい労働や大量で細かい仕事をする必要もあります。彼らの仕事に対する真剣で責任ある態度とこの事業に対する熱意に、私は深く感動しました。責任の重大さを感じ、必ず宣伝をきちんと行って、いただいた図書の力を十分に発揮させようと思います。この事業は簡単な図書の寄贈に留まらず、中日両国民相互間の理解を進め、中日間の友好を体現しています。ここに、私が東北林業大学図書館の全職員および多くの教員や学生を代表し、日本国民、日本財団、日本科学協会、図書プロジェクト室の全メンバーに心より感謝を申し上げます。

2. 中日両国の図書館における異同

（1）図書館の建物や設備の面での違い

日本の図書館を参観しての第一印象は、中国のものと比べて面積がやや小さいが、館内空間の利用が巧みであり、レイアウトは無駄がなく合理的で、読者に便利であるというものでした。特徴の一つとして広く集中書架が利用されていることを挙げることができると思います。しかし、集中書架の使用方法は中国とは違っていました。中国での集中書架は常用図書でないものを保管するのに使い、館員が管理する閉架方式ですが、日本の図書館では集中書架が通常の書架と同じように使われており、目的は単なる空間の節約のようでした。

日本の図書館は、使用する設備の面では、種類から先進性にいたるまで中国とあまり変わりがありませんが、日本の方がより周到に考えられており、より人間的であるということが言えると思います。私たちの目にした最も簡単なネットワーク回線と電源のコンセントでも、十分便利に設計されていました。

（2）人的資源の管理

日本では図書館員への要求水準が高く、大学卒業というだけでなく、確かな図書館専門知識が必要とされます。日本の図書館では専従の館員が少なく、業務内容は

図書館業務を主とした比較的単一なもので、主な仕事は図書館の管理です。一般的なサービス業務はサービス会社からの派遣人員が担当しています。中国の大学図書館では往々にして図書館業務以外の仕事を多く行っており、職員チームも膨大で、人員の階層も色々あり、いろいろな能力水準の人が必要とされており、ほぼどんな能力水準の人でも図書館で職位を得ることができます。

（3）サービスの項目と方式

図書館のサービス項目については、両国とも基本的に同じです。伝統的なサービスかデジタル図書館であるかを問わず、共通したものです。サービスの方式では、日本の方が利用者自身の行うものがやや多く、例えば、マルチメディア文献の閲覧や文献資料のコピー、また、セルフサービスでノートパソコンや閲覧室を借りるといったことなどがあります。

３．日本の風土と人情

私たちは図書館の参観だけでなく、日本の景勝地を観光することにより、日本に対する初歩的な理解を得ることができました。以下、その感想をいくつか述べます。

（1）ずいぶん似ている

日本に着いたときの第一印象は、中国国内とあまり違いが無いという感じでした。言葉が通じない以外は、空港から市内にいたるまで各所で見られる人々は殆ど黄色い肌をしており、当然ながら国内でも見かけるように肌色の違う「外国人」もいました。顔を上げると目に入る広告の文字は大体見て分かりました。多くの漢字が含まれていたからです。建物の様子もそう大きく変わらず、中日両国はずいぶん似ているなと感じました。

（2）飲食の違い

日本へ行く時、友人からいくつかアドバイスを受けましたが、その中には日本で食事をするとき、二人の箸が同時に一つの食べ物を取ってはいけないというのがありました。大きな塊から切り分けて食べるものの場合でも、二人が同時に箸を伸ばしてはいけないというのです。その時にはよく分かりませんでした。それで飲食には十分に気を付けていたのですが、日本に着いて一日してから理解することができました。食事が分けられているからで、一人に一つの膳があり、二人が一つの皿から食べ物を取る機会がありません。手伝うのが他人のお椀からものをつまみ取るのと同然ということであれば、中国であってもいけないことでしょう。日本で食べた刺身は美味しかったのですが、世界的に環境汚染が日を追って深刻化している状況において生魚を常食していて健康が脅かされたりはしないのか心配です。日本人は冷めたご飯を食べるのが好きなようですが、これも私たちには馴染めません。日本にも私たちと異なる習慣は多いと言えるでしょう。

（3）ある小さなできごとに考えさせられたこと

日本での参観中、ある小さなできごとに考えさせられました。ある日、ある大学を参観したとき、途中で私たちは数卓を囲んで座り休憩していたのですが、皆が自然に立ち上がって場を離れると、その時、日本科学協会の担当者が椅子を戻すように注意したのです。その後数日の参観で、図書館であってもその他の公共施設であっても、人の座っていない椅子はまるで誰も使ったことがないように、きちんと元の位置に置かれていることに気付きました。訪日団の各団員がこのことを十分に自覚したと思います。このことは、日本国民は素質が優れており、公共環境を自発的

に維持しているということを証明しているのです。

わずか8日の訪問で、日本に関しては全く初歩的な認識と理解を得ただけですが、今後、両国の大学図書館相互間で交流を強化し、図書館業務を共同研究したり討議したりして図書館事業を発展させられればと希望しています。私たちは日本の各方面の友人が中国に、そして、図書館に関わる同業者が東北林業大学の図書館に参観や指導にいらっしゃることを歓迎します。

延辺大学図書館　副館長 姜文範

訪日報告

2006 年 12 月 4 日から 11 日、私は幸いにも「第 4 回中国大学図書館担当者訪日交流」に参加し日本を訪問することができました。訪日期間中、私たちは日本科学協会、日本財団と武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館、国会図書館といった多くの機関を視察し、至るところで日本の各界から温かい歓迎を受けました。日本側が精一杯計画し手配してくれたおかげで、私たちは今回の訪日任務を順調に完成できました。今回の訪問を通じ、私たちは日本財団、日本科学協会および図書寄贈プロジェクトについて理解を深め、中日双方の感情を強め、互いの友好を増進できました。

1.　図書寄贈事業について深まった理解

当初、私は、ここ数年いただいた書籍が日本科学協会の一部の人が民間に散在する書籍を収集して私たちに送ってくれているだけだと思っていました。そこに含まれる日本財団、日本科学協会、特に図書寄贈プロジェクトの大変な仕事、多くの心血や汗については、分からなかったのです。今回の訪問を通じて私たちは図書寄贈業務の大変さを深く感じました。私たちは、必ず日本科学協会から送られた一冊一冊の書籍を大事にし、きちんと管理して利用していきます。

2.　日本の大学図書館の現状について得られた理解

私たちは今回の訪日で 5 箇所の図書館を参観しました。4 箇所の大学図書館と国会図書館です。私たちの視察した 5 箇所の図書館は、例外なく斬新な施設、広く明るい閲覧スペース、充実した検索端末と先進的な管理システムがあり、国内の少なからぬ高等教育機関の図書館と比べても明らかに優位でした。特に、図書館の管理において本当に「人が基本」、「読者第一、サービスより上」といったサービス理念を体現していました。確かに多くの点が私たちにとってとても良い参考になり、勉強になりました。

3.　友好的な日本国民について得られた理解

中日両国は友好的な隣国で、両国の政治制度は異なり、交戦した歴史もありますが、両国民が何代も続けてきた友好関係は阻まれることのないものです。今回の訪日で私はこのことを切に感じました。例えば、私がホテルでレストランを見つけられなかった時、すぐに航空会社の事務所に取り次いでくれました。そこで私がとてもたどたどしい日本語で探している場所を問い合わせると、彼らは手元の仕事を中断して、自ら私を目的のレストランまで連れて行ってくれました。小さなことではありますが、とても深く印象に残ったのです。

訪日期間中、私たちは至るところで温かい歓迎と接待を受け、日本人の中国人に対す

る友好を感じることができました。本心をいうと、今後もし機会があったら、本当にまた日本へ行って何日か過ごしたいです。日本人の勤勉さ、細かい仕事ぶりや先進的な管理法をよく学び、中国の発展と中日両国の長期的な友好関係に少しでも貢献したいのです。

2007 年 1 月 20 日

吉林大学珠海学院図書館　館長　魯紅軍

訪日の感想

日本科学協会の招待を受け、全国 24 大学の図書館から 27 名の館長と副館長が 2006 年 12 月 4 日～11 日に日本を訪問した。日本に滞在した 8 日間で、武蔵工業大学、芝浦工業大学、成蹊大学、琉球大学の図書館および国会図書館を参観し、日本科学協会の寄贈図書倉庫も見せてもらった。日本財団の笹川陽平会長と日本科学協会の常務理事が代表団の接見とレセプションをしてくれた。期間は僅か 8 日間だったが、私は行った甲斐があると感じている。参観した図書館は経営理念はもとより、管理モデル、建築、内部構造、そして現代化、デジタル化の進捗など、中国のものと比較するといずれも学習し参考とする価値のあるところで、収穫は少なくなかったと思う。次に訪日で得たことをかいつまんで報告する。

1.時勢に順応した経営理念に新たな啓発を受けた

日本の大学図書館 4 箇所と国の図書館 1 箇所を参観したが、数名の館長が紹介や交流の中で強調していたことがある。情報化時代にあっては、概念上は図書館も壁のない図書館であるべきだ。果てない情報の海であり、知識の伝播と共有には人為的な壁があってはならない。人々が文献を検索し利用するときに時空や国から制限を受けるべきではない。ネットワークを利用して自由に交流し、地球のどこにいても、図書と知識は図書館従業員と共にあり、全ての読者と共にあるべきだ。世界的な範囲で図書館の指導者たちは、世界的な範囲でリソースの共有を徹底すべく努力すべきだという。こうした理念の指導のもと、日本の大学図書館相互間、大学図書館と他の図書館との間、街の図書館との間でリソースの共有が行われており、日本と世界の主な国との間にも文献リソースの交換や人員同士の交流関係ができている。日本の情報センターも中国の図書を寄贈する 24 大学図書館に無料で日本語文献検索を開通させ、当然そこには私のいる吉林大学珠海学院図書館も含まれている。中国国内の大学図書館の間でもリソースの共有が長年叫ばれてきたが、CALIS センターのカバーする図書館でしか行われておらず、他の大学間には未だに広汎で実質的なリソースの共有ができていない。これは日中の距離であり今後の努力すべき方向である。

2.図書館の自動化とネットワーク化が進んでいる

5 つの図書館を参観して最初に感じたことは、その外観が美しく上品で雅なこと。内装も環境保護に配慮しているだけでなく非常に人間的で、読者が便利なようにできている。各フロアの休憩エリアには異なる色や形の休憩用ソファーが置かれている。武蔵工業大学図書館の建築や内装は木材を主としたものだが、成蹊大学の建築はガラスを主としており、いずれも特徴的である。図書館の現代化も進んでおり、図書流通プロセス中の自動転送、自動貸出などに現れているが、人力を大幅に節約でき、業務効率も非常に高い。このほか、ネットワークも各都市に普及しており、日本では地域による差が小さい。本学では新館の建設準備中だが、日本の図書館から読者のためのサービスという理念、蔵書のレイアウト、内装の風合いや各エリアの設定などがよい参考になると思う。経費などの都合もあり、学びようがない点も当然ながらある。

3.寄贈図書倉庫の参観により寄贈図書をいっそう大切に感じた

訪日中、私たちは日本科学協会の寄贈図書倉庫も参観した。この参観で私は大きく胸を打たれた。毎回中国で受け取っている寄贈図書は、日本でこんなにも多くのプロセスを経ており、こんなにも多くの人が寄贈のために色々な仕事をしているのだ。私たちの受け取っている図書はかけがえのないものだと感じた。私たちは感動すると共に、寄贈図書を受け入れる責任についても意識した。寄贈図書はきちんと保管するとともに、条件を整えて本が十分に役立てるようにしないと、私た

ちへ本を贈るために懸命に働いているこの人々に申し訳が立たない。本学の新館は間もなく着工され、2008 年 5 月に供用開始予定である。私たちは新館の 6 階に日本科学協会寄贈図書の閲覧室を開設し、十分な開館時間と良好なネットワーク環境を読者に提供して、寄贈書の利用率を高める準備をしている。他にも 2007 年には学院に日本語専攻が追加されるので、これらの日本語書籍が日本語専攻の設立においても重要な力を持つものと信じている。

4.日本人の仕事熱心さと公共道徳水準は学習に値する

訪日中、日本民族の仕事熱心さとまじめな態度は確実に学ぶ価値があると感じた。夜 7 時過ぎでも、大多数の会社やオフィスビルは明かりがついており、聞いてみると残業だとすぐ分かった。しかも、残業手当が付かないことも珍しくはないとのことで、日本の競争が厳しいからだろうと思った。

図書館で読書するにしても、ホテルで食事をするにしても、公共施設であれば、使ったものは自分で元の場所に戻している。目にする人は誰でもそうしており、既に習慣が根付いているのだと思った。私達訪日団は皆が大学の人間だが、食事が終わるたびに団長が注意しても、何人かはやはり椅子を戻すのを忘れていた。中国の他の人々がどうするか窺える。ここから、私たちの公衆道徳教育が足りないのだと分かる。教育は幼稚園から始めるべきなのだ。そして、私は中国の図書館を連想してみた。サービス、業務態度、公衆道徳などの面でまだまだ教育や学習が必要だ。よりよく端正なサービス態度によって、サービス品質を一段階向上させようと思う。各民族にはそれぞれ長所と短所があるが、私たちは他者のよいところだけを真剣に学ぶことで、自身がとどまることなく進歩できるのだ。

まとめると、今回の学習は色々な面で大きな収穫があった。これらの収穫は今後の業務を指導していける一つの存在になると信じている。

2006 年 12 月 20 日

長春師範学院図書館　副館長　郭淑芹

訪日視察報告

日本科学協会の招待を受け､｢第四回中国大学図書館訪日団｣の一行27人は､2006年12月4日から12月11日の八日間、視察研修を行いました。

今回の視察研修で、私たちは類型の異なる図書館を視察しました。視察研修や交流を通じ、視野を広げ、相互理解を促進し、友好を増すことができ、日本の科学技術や経済の発展のすごさを感じ取ることができ、収穫は多かったと思います。日本は自然環境が良いだけでなく、現代化も進んでおり、経済発展も早い国です。訪日団は日本の科学技術、歴史、文化、風俗や人情、自然環境をある程度理解することができ、得るものは多かったと思います。今回の訪問は、中国の大学図書館が国際交流をさらに進めるためのよい基礎として、私たちの今後の業務、図書館運営の理念、サービス理念への大きなヒントや助けとなり、視界を広げ見識を豊かにしてくれました。

1．訪日視察の概況

（1）教育・研究図書有効活用プロジェクト事業

今回の視察研修では、一貫して日本科学協会のご厚情と友好的な対応を賜り、飛行機を降りたときから、日本側の思いやりあふれる接待を受けました。日本財団の笹川陽平会長、日本科学協会の濱田隆士理事長が自らメンバー全員と会見してくださり、双方にとって友好的な交流がもてました。笹川会長によると、日本財団は日本の各界から寄贈図書を収集する資金を援助しているそうで、その目的は民間での交流であり、また、日本語を学ぶ学生を助けることであり、この活動は日中両国の交流の成果でもあり、今後この事業の展開を強化することにより、中日の友好と発展を促進することができるとのことでした。

（2）図書館の建物ー独特な風格

中国代表団は日本訪問で、東京の武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、国立国会図書館、琉球大学図書館を参観しました。いずれも風格の異なる図書館の建物でした。日本では、図書館は人類の知識の宝庫、人類の文明の神聖なる殿堂として、大学図書館の建築、美化環境そしてアクセント、私たちが目にした図書館の内装は、品格が柔和で、色調が淡く、基調の異なる家具の配置により、利用者に親しみやすくて明るい統一感をもたらしています。図書館はある程度重要文化施設と位置付けられており、このことが大学図書館の光となっています。

（3）目にした日本の自然、歴史、文化

代表団は、日本訪問期間中、東京、大阪、沖縄の三都市を回り、皇居、浅草と秋葉原、首里城、天守閣、東大寺などを参観しました。日本の飲食文化を体験し、日本舞踊を鑑賞しました。日本民族の民俗に対する理解が深まりました。一衣帯水の隣国ー日本の自然風景を本当に感じました。

2.. 先進的な管理理念と管理モデル

（1）武蔵工業大学図書館

代表団が最初に視察したのは、武蔵工業大学図書館です。館長が自ら図書館を紹介してくれました。設立は1929年、工科大学の図書館で、大学には2学部

11 学科があり、在校生は 6,500 名、閲覧席は 655 席、蔵書数は 245,000 冊、建築面積は 1,306.74 平米で、木造建築の図書館です。担当職員はわずか 8 人で、手が回らない仕事は人材会社に委託しており、これは日本の高等教育機関での管理モデルの一つとなっています。

（2）芝浦工業大学図書館

私たちが芝浦工業大学を訪問した時、図書館事務部の山崎部長は自ら代表団に図書館を紹介してくれました。建物は今年 4 月に竣工したもので、大学には全 11 学科あって 2 つのキャンパスに分かれており、学生は 7,345 人で、電子雑誌類の蔵書数は 12 万冊です。代表団は広くて明るい閲覧室、レポーティングホール、風格ある図書館の事務設備を参観し、日本の茶道も体験することができました。

（3）成蹊大学図書館

成蹊大学図書館は、私立大学図書館で、蔵書は 100 万冊、定期刊行物は 9,800 種あります。建物は独特な風格があり、地下 2 階、地上 5 階で、各フロアには大小のガラス製の球体が設置されております。これらは、型会議室、応接室となっていて、中へ入ると宇宙船のような感覚がしました。

（4）国立国会図書館

国立国会図書館は 1948 年に創設され、国会に所属しています。2002 年 4 月に京都、大阪、奈良の三府県を跨ぐ関西文化学術研究都市に関西館を設立し、同年 10 月に開館しました。

建築面積は 59,500 平米、蔵書収容能力は 600 万冊で、地上 4 階、地下 4 階の合計 8 フロアあり、地下の各階は書庫ですが、書庫の中心には採光室があり、書庫の一番下まで光が届くようになっています。そのほか、地下 3 階と 4 回の一部は光るつり板になっています。書庫内には資料を閲覧室カウンターに送る資料転送機も設置されています。地上の建物は全ての壁がガラスで、正面広場は台形の芝生になっています。

T 字の長い廊下を通って地下一階のロビーに入ると、利用者用タッチパネルに自分の利用カード番号を入れることで好きなところへ閲覧しに行けるようになります。広くて明るい閲覧室は 4,500 平米あり、環境全体が快適ですっきりしています。一部は集中書架で、一部は展示書架になっています。集中書架には感応ランプがついており、非常に独特な設計です。

3．人を基本とするサービス理念、強い開放意識

図書館には自動転送装置があり、読者サービスに便利で、参観した大型図書館ではどこでも同種の設備を持っていました。貸し出し窓口から一階の書庫に読者の借りたい本をファックスで通知すると、それを自動転送装置が書庫から従業員の手元に届け、また、それを返却もするのです。これは人手を節約できるだけでなく、読者にも便利です。

また、図書館には大きなパーティションがあり、閲覧スペースを機能ごとに分けていました。決して伝統的な収蔵を主とする建築モデルではなく、オープンな建築モデルを採用し、各閲覧コーナーは低い家具で仕切られており、図書館の玄関で鞄を預ける必要がなく、何ら手続きなしで直接それらのコーナーに入れます。一目瞭然で、とても分かりやすいです。

八日間という時間が過去のものとなっても、訪問期間にいただいた日本財団、日

本科学協会のご厚情ともてなし、田受入担当者の緻密なスケジューリング、図書館に携わる同業者各位の温かい対応により、私たちが円満に研修任務を完遂できたことは、私たちの美しい記憶として残っています。

2006 年 12 月 26 日

中国医科大学図書館 副研究館員　劉紅宇

訪日追想

2006 年 12 月 4 日､｢第 4 回中国大学図書館担当者訪日団｣一行 27 人は北京、上海、大連から飛行機に乗り、日本の成田空港に到着した。空港では日本科学協会のスタッフが我々を出迎えてくれた。訪日団はバスに乗り、東京のサンシャインプリンスホテルに入り、そこで歓迎パーティが開催された。歓迎宴は濱田隆士日本科学協会理事長が主催し、パーティは友好的で親しい交流の中で進行した。宴会中に名刺を交換したり、酒を勧めたりして訪日団のみんながこれらの熱烈な場面をカメラに収め、自分の記憶にインプットした。

滞在中に我々は武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館等知名度の高い図書館を見学し、一般公開の国立国会図書館を見学した。各大学の図書館はそれぞれの特色を持っている。現代的な建築、木造と鉄筋構造の建築、さまざまな造形の閲覧空間、完備な現代化施設は目と心を楽しませてくれるものばかりであった。

日本において、文化サービス業としての図書館は、読者に良質なサービスの提供の為、殆ど全ての図書館に相談カウンター設置し専属の担当者が読者からのさまざまな質問に対応し、読者が館内で文献と資料を検索する手助けをしている。相談員については学歴、豊かな経験と知識が要求され、基本的に館内の高級職員、或いは教授が担当している。その他に読者は在宅のまま電話または郵便を通じて質問、或いは図書と資料を借用することができる

日本の公共図書館は、相談サービスに対して制限がなく社会全体に一般公開されている。国立国会図書館は国会と政府機関の諮問サービスを提供すると同時に一般社会にもサービスを提供している。全ての相談サービスはコピー代を除いて無料である。巨大なデータベースは文献検索の自動化と図書館資源の共有の保証であり、相談サービスのデジタル化の土台の保証である。日本の図書館はデータベースの整備を非常に重視している。1998 年現在、国立国会図書館は大部分の蔵書と資料をデータベース化した。具体的には、和文図書書目データベース、欧米文図書書目データベース、和文ジャーナルデータベース、欧米文ジャーナルデータベース、国会会議議事録データベース、科学技術資料データベース、点字図書と音声・画像資料データベース等 37 データベースとして整備され、延べ 1000 万項のデータをデータベースに保管されている。これらのデータベース内のデータはまた毎年相当量において絶えず追加されている。整備中のデータベースを加えて国立国会図書館はほとんどすべての蔵書をデータベース化している。このようなさまざまな図書館を見学して図書館の「読者第一」という管理理念は我々に深い印象を残してくれた。これらは、今後中国の図書館の参考になる。

東京、大阪、沖縄、京都、奈良等日本のいくつかの歴史的な名所を見学した。文化と景色を見て日本の歴史についての理解を深めた。特に、沖縄に関してはあまり知らなかったたが、今回の訪問を通じてよく分かった。沖縄は時には「琉球」と呼ばれ、琉球評議会は昔に中国が付けた名称である。沖縄は昔、中国大陸のそばにある琉球王

国の一つ(台湾には「小琉球」という地方がある)である。このような歴史的背景もあり沖縄は中国文化の影響を多く受けた。西暦 14 世紀に沖縄は「琉球王国」という位置づけで独立と繁栄を享受し、当時の琉球王国はアジア各国間の貿易において重要な中枢地であった。それ故、近隣諸国の文化を吸収し、融合したのである。特に、工芸、建築、飲食等は中国文化から受けた影響が大きいと言えよう。その後、1609 年に九州薩摩藩からの攻撃を受け、琉球王国は薩摩藩の属地になった。1868 年の明治維新により琉球王国は正式に日本国の一つの県になった。1945 年第二次世界大戦において沖縄本島は日本の唯一の陸上戦場であった。その後、敗戦により米軍に接収された。米軍は沖縄中部の空軍基地に進駐した。1972 年にようやく日本に返還された。これらの歴史的背景から沖縄は琉球王国、日本、中国、米国の文化を融合した文化の坩堝となった。

短かったが、日本の旅が我々に最も深い印象を残してくれたのは澄み切った海、青々しい空、静粛な京都の古道、繁華な東京の道路と流れている人の群れではなく、心の悟りである。一人の中国人として異様な気持ちで日本の土地を踏み入れたが、思わず行く先々で熱烈に歓迎され、笑顔でお辞儀された。バスに乗ってからその場を離れずに我々の姿が見えないまで手を振ってくれた。片言の日本語と手振りで思っていることを表現しようとした時も辛抱強くよく聞いてくれた。そして笑顔でこっちの話の意味を理解するよう努めた。身近に接したら人間同士が相互に尊敬し、親切に付き合うことこそが文明社会であると感じた。

数日間の訪問を終えて 12 月 11 日に日本の友人達は我々のために送別パーティを開催してくれた。「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」団長はその場で挨拶した。日本科学協会から細かい手配と熱烈な歓迎について心から感謝すると述べた。各大学図書館の代表者も日本科学協会常務理事及びスタッフ達に心のこもった感謝の意を伝えた。送別パーティは友好的で熱烈な雰囲気の中で終わった。

2006 年 12 月 15 日

大連外国語学院日本語学院 副院長　宮 偉

「第四回中国大学図書館担当者訪日交流」参加の感想（日本語原文）

2006 年 12 月 4 日から 12 月 11 日の 8 日間、図書館の圏外にある私が、大学側の判断で、日本財団・日本科学協会主催の『第四回中国大学図書館担当者訪日団』に参加させていただくことになりました。この団に私でいいのか、と最初はかなり躊躇っていましたが、行ってよかったと今はそう思っています。

まずは、日本財団・日本科学協会が実行している「教育・研究図書有効活用プロジェクト」を、この目で見てわかるようになったのでよかったのです。日本科学協会から数多くの図書をいただいて、日本語学院の学生諸君が存分に利用していることをずっと前から聞いてそして感謝はしていますが、一体どのようなルートからなのかなどは、よくわかりませんでした。今回は、実際に日本財団及び日本科学協会の皆さんと接して、贈書事業のことを詳しく説明していただいただけでなく、物流会社にも行ってみて、日本から中国へ、そして大連外国語学院をはじめとする中国の諸大学へ贈書が来てくれる流れがよくわかるようになりました。国と国との友好交流には、まずはその国民の相互理解が不可欠です。日本財団・日本科学協会からいただいた本は、まず中国の日本語学習者に利用されていて、彼らの日本語勉強及び日本理解に役に立っています。帰国後、本学日本語学院の学生諸君に贈書のことと日本財団・日本科学協会から一杯感じ取った情熱を話しました。いただいた贈書の、2562 名の日本語学習者を持っている大連外国語学院日本語学院—世界一日本語養成基地での更なる利用を期待しております。

それから、日本財団・日本科学協会の皆さんと知り合って良かったのです。中国に対する情熱があってはじめて贈書事業が始まったと思います。訪問中、日本財団・日本科学協会を訪問して、笹川陽平会長をはじめとする方々にお話をいろいろ聞かせてくださいました。中国に対する皆様の熱意にはまず感心しました。そういえば、日本に行く前にも、教育・研究図書有効活用プロジェクト室の皆さんが、いろいろと訪問の日程を考えてくださったことを何度も感心させられました。何回も私たち訪問者の希望を聞いてご丁寧に日程を作ってくださって、各地の天気予報と日本滞在中の注意事項までも教えてくださったりして、至れり尽くせりの手本といっても決して過言ではありません。本当に感激しました。言葉は時には無力だとよく言われますが、まさにその通りだとしみじみ感じました。日本通と言われる私も、今回の訪日を通じて皆さんからたくさん勉強できました。

そして日本の図書館を見学できて良かったのです。読書好きな私は、小さいころから図書館に馴染んでいます。中国の図書館のことはよくわかりますが、今回は日本財団・日本科学協会の皆さんのご手配の下で、日本国会図書館をはじめ、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館及び琉球大学図書館など国・公・私立など特色を異にする図書館を存分に見学しました。日本の図書館の設備とそのサービス理念には、正直に言ってまず驚きました。そんな図書館に恵まれたら、こんな愚鈍な私ももっと頭が良くなるのではないか、と考えたことさえあります。

第四に、中国大学図書館の関係者と知り合ってよかったのです。図書館によく行っていますが、よく知っているのは本の貸し借りを実際にやっている職員だけで、トップクラスの人に接するのは今回が初めてです。図書館の蔵書同等の知識を持っている人間だ、というイメージは今も変わっていません。それだけではない。皆さんはなかなか親切で、高い人格の持ち主です。訪日中、私がたどたどしい日本語で皆さんのためにちょっとしかやっていなかったが、皆さんから高く買いかぶられて、恐縮そのも

のです。帰国後も、大連での大学図書館館長の集（酒）会に、私までも仲間入りさせていただきました。日本語教員の仕事を辞めて図書館館員になろうか、と真剣に悩んでいます。

最後に、日本文化も身をもって感じ取って良かったのです。日本社会言語学を専攻にしている私は、図書を通しての勉強だけではなく、実際に日本に行って、日本人と話をして、日本文化に接する機会を常に大切にしています。今回も、日本財団・日本科学協会のご配慮の下で、東京、沖縄、大阪、京都、奈良など日本を代表できる所を見学して、日本文化を満喫して日本に対する理解をさらに深めました。訪日中の写真などを日本語科の学生諸君にも見せたりして、今回の訪問の成果をさらに拡大させようと思っております。

簡単ではありますが、私の感想とさせていただきます。本当に、日本財団・日本科学協会の皆さんに感謝します。私も、日本財団・日本科学協会のために、中日友好交流のためには、微力ですけれども何かができればと思っています。

今後ともどうぞよろしくお願いします。

遼寧師範大学図書館 館長 張志宇

勤勉で仕事熱心ー民族の強さの源

日本は面積が中国東北部の黒龍江省の 82%しかない島国で、四方に隣接国がなく、資源にも乏しいのに、どうして世界の経済大国になれたのか？日本を訪れたことがない中国人に言わせると始終が謎である。2006 年 12 月初め、幸いにして日本科学協会の招待を受け、「第四回中国大学図書館責任者訪日代表団」として訪日し文化交流を行った。往復 8 日で 5 都市を回り、成蹊大学図書館、国立国会図書館など 5 つの図書館を訪問し、琉球王朝遺跡、古都奈良、京都の古い建築を一部参観した。ざっと見ただけではかなく消えてしまったが、心の謎は少し解けた気がする。勤勉で仕事熱心な精神についていくつか人やものを見ただけだが、少しは分かったと思う。

日本科学協会の担当者は、今回の文化交流活動を準備するためには細かさや面倒ごとを厭わず、心血を注いでくれたといって過言ではない。訪日予定の 3 ヶ月前から準備作業に着手したとのこと。私本人は担当者とスケジュール関連で電子メールやエアメールを十数回も送り、何度かは直接電話したこともある。私たちが訪日で交流する機関やスケジュールを綿密かつ入念に手配してくれたうえ、一行の意見を聞いて調整し最善の案を作ってくれた。それだけでなく、各人の食習慣を確かめたり、訪問予定都市の天気予報を送ってくれたり、果ては必要になる服装や日焼け止め、雨具などといった細かいことまでメンバーに代わって一つ一つ考えてくれた。訪日中は、参観や交流、表敬訪問、乗車中、宿泊中、食事中いずれにも担当者の爽やかな笑い声が聞こえた。僅か 8 日だったが、私たちはずっと、春風が頬を撫でるような、家にいるような空気の中で過ごすことができたように感じる。

日本社会の各業界では、通常、朝九時から夕方五時に勤務し休息をとる時間制である。日本に着いた日、私たちは成田国際空港から東京へのバスに乗った。市街地に入ると、現地時間で夜の 6 時を過ぎていたが、街道両側のオフィスビルや工場では明かりが点っており、車窓やビルの窓から、中の人々が勤勉に仕事をしている様子がはっきりと見えた。私にはどうも不可解だった。同行していた日本側スタッフに、日本では普通に残業する習慣があるのかと聞いた。残業代はどうやって支給しているのか？　その回答では、残業代の有無に関わらず、部門の責任者がその日の業務進捗を見て自主的に勤務時間を延長し、部下が異議なく従うのが普通だという。

訪日の二日目は早起きして散歩した。宿泊したホテルの前には十数台のタクシーがいた。車種が一致で色も同じ、止まる位置もきちんと並んでいた。運転手は皆が五十歳前後で、革靴をはき、白い手袋をはめていた。三台目以降の車では、運転手が車内で静かに順番を待っており、前二台の運転手だけが外で車の掃除をしていた。二台とも非常に清潔だった。好奇心が出たので足を止め観察してみると、運転手は二人だけ先に車内の客席を整理しており、手袋をしていた。慎重に、貴重な芸術品を壊すまいとしているかのような態度だった。それから両側のドアを開け、外に立って車内を細かく見回す。穏当でない箇所がないか調べているようだった。続いて試すように両側のドアを開閉し、最後に四輪の空気圧を検査する。満足するまで行っていたようだ。こうした情景は、実のところ、中国国内で目にしたことがない。そのとき思ったのが、何が彼らに自分の仕事道具をそう扱わせているのか？ということだ。ホテルの部屋に戻る途中、自分でその答えを見つけた。それは民族が長らく育ててきた仕事を重んじる精神なのだ。二人の運転手はここまで心を込めて仕事道具を扱い、心では乗客への責任を思い、同時に自分の就いている仕事への責任も感じているのではないだろうか？

私たちが各地の訪問に利用した交通機関は主に旅行社の大型バスで、運転手はだいたい 40 歳から 50 歳ぐらいだった。代表団は全部で 27 人。全員が一個は荷物を持ち、一人で二個という人もいた。荷物を持って出かける必要があるたび、運転手は前もって車の傍で待機し、30 個近い荷物を順番にトランクへ入れ、目的地に到着すると先に下りて一個ずつ取り出した。荷物を持って

でないときは、乗車や下車のたび、運転手はメンバー一人一人に挨拶をしていた。私はふと中国の運転手を思い出し、その対照的なさまに赤くなった。

日本のホテルの清潔さは世界公認で、無駄に語ることもない。ほんのちょっとしたことが中国では見かけないことなのだ。泊まる部屋のライティングデスクは位置が分かりやすく、紙のカードが置いてあった。何ヶ国語かでいらっしゃいませ、ご意見をお待ちしておりますといったことが書いてある。面白いなと思ったのは、カードの目立つ位置にその部屋のサービス担当者が直筆で署名していることである。何のために？私の答えは、表面上は顧客とのコミュニケーションをしやすくするためで、より深いところでは厳格に自律した仕事を重んじる精神の涵養のためだ。

12 月 9 日、私たちは沖縄の那覇空港から大阪への搭乗手続きをした。待合ロビーで遭遇したできごとが感動で目頭を熱くし、ずっと忘れられない。車椅子に座った乗客が、なにやら焦った表情で何かを訪ねようとしていた。すると空港制服姿の女の子が早足でやって来た。年齢は 20 歳前後。車椅子の傍でスカートを調えると両膝を床につき、頭を起こして、根気よくその乗客に何か答えていたのだ。カメラをもうスーツケースに入れてしまったのでこの感動の場面を撮影することはできなかったのが今でも非常に残念である。しかし当時の光景は深く私の中枢神経を刺激した。ナイフのように脳に刻まれている。両膝をつくのは私たち中華民族では古くから若手が先輩に対し、家臣が君主に対してとる敬礼である。私は自分の良心に尋ねてみた。私の同胞は何人が今でもこうした意識を持っているだろう？何人がこうした行いをできるのだろう？約 20 歳の日本の女の子が、日本で、気づかないうちに、私たち中国人に深く反省させる授業をしてくれたのだ。これは源を同じくする優れた伝統文化なのか？厳格な仕事を重んじる精神なのか？それとも別の何かなのか？　21 世紀の今、中華民族と日本民族の違いはどこなのか？確かに深く考えさせられる。

日本への一行は行きも帰りも慌しかった。短い間ではあったが、見聞きしたもの、感じ取ったものは、詳しく整理されてこそいないが、とても大きい利益となった。一衣帯水の隣国にあって、中日両国の政府はきっと両国国民の大局の利益から出発し、親睦友好関係を更に発展させてくれるだろうと深く信じている。大同小異で、経済や文化ないし政治領域での協力を強化させることを。中日両国国民の友誼が長城や富士山のように、世代を超えて保たれることを。

（2006 年 12 月 23 日　大連にて）

大連医科大学図書館 副館長　朱長利

訪日での収穫－所見と感想

2006 年 12 月 4 日から 11 日のちょうど一週間。中国 24 大学図書館の館長による訪日団が日本を訪れた。

1. 今回の訪問の主な目的

日本科学協会、日本の図書館および日本の文化を理解する

2. 訪問活動の主な経過

①日本財団と五つの図書館：武蔵工業大学図書館（私立）、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、国会図書館、琉球大学図書館

②五つの都市：東京、沖縄、大阪、京都、奈良

③参観したところ：茶道の体験、皇居、日本皇居、浅草寺、首里城、琉球舞踊、美ら海水族館、金閣寺、東大寺、清水寺、唐招提寺、大阪城天守閣等

3.　主な収穫

（1）　簡単な日本紹介

ガイドが日本はタマゴの上に建てられた国だと話していたので、帰国後に日本の資料を調べてみた。日本は太平洋プレート上に位置し、火山活動も頻繁で、人々の生活にかなりの不都合をもたらしている。しかし火山の分布する地区は景色が美しく、温泉資源も豊かなので、著名な観光地や療養地となる。この論法は中国人もよく言う短所を長所に変える弁証法だろう。日本の国土面積は 377,887.25 平方キロで、ロシアの約 1/45、中国とアメリカの 1/25 で、四川省一つ分の大きさに相当するが、人口密度は四川省よりやはり大きい。狭い土地に人が多く、資源もない。しかも台風や津波、地震が頻繁に起きる。しかし、見る角度を変えると、こうした環境は日本人の深刻な危機意識、努力の精神を育んでもいる。東京や大阪の空中では、片やきらきらと輝く海、片や櫛の歯のように立ち並ぶ摩天楼が見え、海が計画的にブロック分けされているような感じだった。海を渡る橋！高速道路！高架橋が縦横に交錯している。ガイドによると、道沿いに見える壮観な建物の足元はもともと海だったところで、埋め立て造成したところだそうだ。また、都心部での建築は地下に向かって拡張しており、地下七階まで達するものもあるとか！今回見学した国会図書館は地下八階建てである。

（2）日本の空気、住居と交通

知らない国に来てみて最初に感じたのは空気の質と都市建設についてだった。日本の空気の質はガイドの話によると「洗車は月に一度」だそうで、その一片が窺える。自分で見ても走っている車は全て清潔で、しかも 7 日間で 1 箇所しか洗車スタンドを見なかった。中国ではいたるところに洗車や修理の店があり、大違いだ。

東京と大阪は現代化された都市で、高層ビルもあり、ビルの間には二層の高架橋があったりもした。大連や中国での大都市にあるような美しい大広場はなかった。緑化もあらゆる手を尽くしており、歩道には落葉樹が植えてあってとても自然に見えた。木々の間には落ち葉の袋が見かけられた。しかし 7 日間のうちで掃除の人を見かける機会がなかったので、いつ掃除されているのか分からなかった（もしかして毎月一度だけ？）。夜 9 時過ぎに帰っても、朝早く起きても、掃除している人を見かけなかった。

京都と奈良は中国の西安に相当する街で、往時の都だったため、寺院が多く、建物も平屋が多い。ところどころ街中に農地が見える。

三つ目に感じたことは道路の交通状況である。日本人は礼儀を重んじ、秩序を守ることは世界でも有名だが、道の往来もそのとおりである。日本では、道を行く人の全てが、特に自動車のドライバーが礼儀正しく、交通ルールをきちんと守り交通安全を守っているので、通行の効率もよく、社会の調和がよく現れている。大連と比較すると、日本の市街地には太い道などないと言える。立体交差もあまり見られず、都心部の幹線は対面四車線に過ぎず、多くは対面二車線である。東京は車が多く走っているが、基本的に渋滞はない。道路の通過率が極めて高く、事故率は低い。往来は盛んだが秩序だっている。これはドライバー全体の良好な運転習慣によりなされる交通効率のよさだ。

まず、日本人の運転は落ち着いている。加速するために車線変更を繰り返す車が極めて少ない。（大連ではよく見られる現象である）。誰もが通常一車線走行を守っており、早いものと遅いものにそれぞれ決まった位置がある。実際のところ頻繁に車線変更しても違法ではないのだが、道路全体の流れるスピードを低下させてしまいやすい。正直に一車線を守るのは、主に日本のドライバーの自主規制によるものだ。日本の自動車学校では、教習生の卒業時に必ず署名する承諾書がある。その中の一文に流れを乱さず、個人の効率のために全体へ影響を及ぼさないという約束があるのだ。日本のドライバーはこれを承諾し、そうして実行している。

次に、日本人は車の運転ルールを守る。明らかな交通法規を遵守するだけでなく、習俗の一般化したルールもドライバーの間で暗黙の了解となっており、争いを避け、無駄な譲り合いも避けて、全体の流れをスムーズにしている。たとえば、二台がまとまって走っていたり支線から幹線に入ろうと並んでいるとき、ドライバーは一台ずつ交互に合流する。また、右折車は順番待ちの列が長くなっても対向する直進車を先に通す。

日本では、一車線の流れが遅くなっても道路全体の渋滞にはつながらない。東京の都区内では密閉された片側二車線の高速道路網があり、車の流量が大きい。道路の分岐はどこでも見られるが、ある方向に向かう車は１、２キロ手前で片側により列として緩やかに移動する。反対側の車線は滞りなく流れ、多くの車が道路の片側に偏って分岐点で渋滞し、二車線とも詰まるというようなことは絶対にない。効率のよい交通はまた、日本での運転が安心できるものだという理由にもよる。歩行者と自転車は勝手に道路を横切らず厳格に信号を守るので、道路の安全と交差点での通過率が極めて高いのだ。ドライバーは青信号を待つだけでよく、完全に安心して全速で通過できる。根本的に「転ばぬ先の杖」としての減速が要らないのだ。道路上に横断歩道が描かれているところには信号機がある。これは先進的な技術で車と歩行者の通行を保証しているのだろうか。車が狭い街道を飛ぶように走っている景色は、この国の効率をくまなく言い尽くしている。

政府の統計によると、日本は全世界でも交通事故率が低い国の一つである。それでも、日本政府は国民に対し交通マナーに気をつけ、交通安全を重視するよう呼びかけている。日本の通りにある多くの派出所では札が掛けられており、前日の交通事故による全国の死亡者数と負傷者数が書かれているのを目にした。交通事故の多発地帯では一般に人目を引く看板が置いてあり、通る車や歩行者に警告している。

日本の道路ではクラクションが少ない。ハイビームのフラッシュは相手に警告し道を空けさせるためのものではなく、「お先にどうぞ」の意味である。譲ってもら

うと、ドライバーは「ハザードの点滅」で感謝を表したり、手を挙げたり頭を下げたりもしてお礼をする。秩序ある道路交通環境は、小さく言っても国民の礼儀正しさとルールを守るよい習慣が表れており、大きく言うと、平和で穏健な、ルールを遵守する一種の健全な社会心理や、社会全体の調和した雰囲気が表れている。また、日本の乗用車は基本的に小さくて排気量も少なく、価格も安い。特に京都、奈良、沖縄ではこうした車が多く、だいたい80%ぐらいではないだろうか。

(3) 日本の清潔さ、静かさ、秩序のよさ、便利さ、周到さと細かさ

どこでも路上は清潔で、訪れたレストラン、ホテル、図書館などの公共施設も清潔だった。山も水もきれいで、ホテル内の水道水は生水でも飲めるそうだったが、敢えて飲んではいない。道行く車も清潔で、みな新車のようだった。

日本には失業者が少ない。東京の人口は 1300 万人で北京と同じぐらいだが、北京で見られるような混乱や無秩序ぶりは全くない。日本の商店は閉まるのが早く、訪日中の七日間にショッピングの時間が確保されていなかったので、誰もが夜の時間を利用していたが、夕食を終えると 8 時過ぎは過ぎており、店は閉まっていた。沖縄、京都、奈良では人が明らかに少なく、日中に道路を歩いても数人と目にすることがなく、夜まで死んだように静かだった。静かさのもう一つの原因は、車がクラクションを鳴らさないことである。また人々も大声で話したりはしない。聞いた所によると、日本での犯罪率は低く、拾ったお金をきちんと届けるようなことは普通にあるという。自身も目にしたのが、日本の路面店の一部はオープンになっていて監視している人もなく、店員も多くないのに、皆が品物を手にすると自分で店員を訪ねていることだ。これだけでも一つの説明になる。

日本の自動販売機にはタバコ、飲み物にはコールドとホットが揃っており、品揃えが多いだけでなく、いたるところに備え付けてあり、便利である。飲料の価格は 120 円～250 円と開きがあり、缶入りのコーヒー、茶飲料、ビール、タバコなどの価格は 270 円～330 円である。

日本在住の中国人ガイドの話では、日本と中国とを比べると、20 年から 30 年の差が見られるが、見えないところでは 50 年かそれ以上の差があるのだそうだ。その見えない差というのは人々の観念と素養である。自室であるビデオを見たことがある。服のたたみ方で、ある日本人女性が T シャツなどのたたみ方を解説しているものだったが、シンプルですばやく、日本人の細かさと注意力を見て取ることができた。今回の訪問中、この一点がまず日本科学協会のしてくれた手配に表れていた。彼らの綿密さと気遣いは毎日毎時、表れていた。事実、それでこそこの訪問日程が完成したのだ。大学教員である我々も当然、時間はかなり遵守するほうである。

キャンパス、図書館、空港、商店やホテルのいずれにも喫煙する人のための場所や部屋があるのに気づいた。また誰もがこうした規定を守っていたので、私たちの中の喫煙者もこの問題には特に注意した。大連理工大学図書館の劉館長はより身にしみただろう。喫煙も問題は個人の問題であるが、公共施設で専用の場所を設けて使用に供し、また喫煙室に喫煙は健康に有害だと貼り出しているのは、喫煙する人を尊重するだけでなく、注意も喚起しており、喫煙しない人もより尊重している。帰国後、当館では 12 人で瀋陽を訪問し、数大学の図書館を参観したが、どこにも喫煙室はなく、部屋の隅に吸殻が落ちていたりした。私たち自身も数人の学生が階段の踊場でこっそりとタバコを吸っているのを見かけた。これは危険だし、喫煙者を尊重していない。本学の新図書館では喫煙室のようなものを備えて細かく配慮できるだろうか？

私たちの泊まったホテルではサニタリーの便座が全て保温機能つきだった。ホテル、空港、商店などのトイレはどこも清潔で紙やハンドソープなどが全てきちんと揃っていた。トイレは TOTO のユニット式で、基本設備が揃っており作りも精巧だった。便器には洗浄機能もあり、個室には例外なく 2 組の紙がセットしてあった。こうすることで紙を使い切ったときに管理人が気づかなくても利用者が困ることはない。ハンドドライヤーはU字型で、手を上から差し込むと水滴が下へ吹き飛ばされる。ホテルのトイレは小さく、場所によっては便器が斜めになっていたが、どこでも暖房便座と洗浄器がついており、操作ボタンが片側のパネルにまとめられていた。ホテル内の剃刀、ハンドソープ、シャンプー、入浴剤、シャワーキャップ、櫛、ドライヤー、冷蔵庫などは全てきちんと揃っており、ないものがなかったので、自分の持ってきたものは使う必要がなかった。どこのトイレも非常に清潔！これは中国ではそうはいかないことである。中国ではトイレから 50 メートル離れれば二箇所はトイレが設置されている。本学の図書館もそうなっているが、何故かはわからない。

泊まった部屋は、入って中を一瞥すると、むしろ床にベッドが一つおいてあるだけの場所と言うほうが正しいが、基本的に空間は余っていなかった（2 人では歩くこともできない)。まさに寸土寸金！テレビは 17 インチ液晶画面で、チャンネルには有料のものと無料のものがあった。有料のチャンネルは明らかにアダルトだったので実験はしていない。

街に出るといたる所に無料宣伝資料が多くあり、精緻でもあったので、少なからずもらってきた。安いものは全て MADE IN CHINA だった。例えば百円ショップ、例えば安い服や靴の類である。こうした商品は中国で加工されているのだろうが中国では売られていない。中国人はここまで細かいものを作れるというのに、どうして中国の客に向かうと日本の客に向かうように真剣に丁寧にできないのだろうか？

食べ物も精巧にできており、一食で食べる量は多くないが、十数枚の小皿や鉢が漆の盆に並ぶと盛りだくさんに見えて、またとてもきれいだ。この加工は比較的複雑なのだろう。

日本の男性ホワイトカラーは普通スーツで、ワイシャツにネクタイを締めている。夏に屋外が40度にもなってもそうしている。炎天下でもこうした正装でいるため、労働者が街中で昏倒するようなことがあってもおかしくはない。私たちの団長やリーダーも、大学図書館の参観時にはスーツ、ワイシャツ、ネクタイを身につけるよう要求してきた。私はタクシーの運転手もスーツと革靴なのに気づいた。実際のところ誰も気にしているのではなく、これが日本人の職業習慣なのだろう。特に沖縄の琉球大学図書館を訪問したとき、当地の気温は 25 度前後あった。私たちは暑いのに正装の必要はないと言ったが、日本人はやはり正装だった。

レストランでの食事で、食堂へ入るのに靴を乱雑に脱いでいたが、出るときには店員がきれいに並べてくれていたようで、そろってつま先が外を向いており、すぐ履けるようになっていた。東京のマンションには盗難防止ドアがなく、多くのドアはとても薄い木板やガラスであることに気づいた。たまに一階には防犯フェンスを見かけたが、二階以上で見かけることはなかった。私たちが泊まったホテルには「客室検査」がなく、帰るときはそのままでよく、室内にある札で費用を精算すればよいとのことだった。中国でホテルに泊まると、チェックアウト時の「客室検査」は省略できない。多くのホテルは物品損害賠償価格表すら持っており、非常に信用していないことが表れている。

日本では道路両側の緑が野生の草花で、人工的にならした草地ではなかった。あるとき道路の中央分離帯を見たら、中国にもよくあるエノコログサだった。これは今提唱されている元の生態系の概念だろう。実際、その土地の植物が最も当地の土壌や機構に適応している。北京や大連では数年前に費用を投じて国外から草の種を輸入したが、それらは北方の乾燥した気候に適応せず、大量の水資源を投じて灌漑してやらねばならないものもあり、もともと水が不足気味の私たちにとって泣き面に蜂だった。北京がオリンピックの申請をしたときにいたっては長安街の枯れ草を緑色にそめたそうである。これも目に見えない距離ということか！東京の街の姿を見ていて感じたのは緑化率が極めて高いことである。裸土の見えている土地はほとんどなく、たまに片隅が少し空くと、木が植えられたり花の鉢が置かれたりしていた。当然、京都、奈良や沖縄はさらによく、一種の自然やロマンティックな景色が長寿の元だろうと思う。ガイドの話によると、東京などと比べストレスが少ないせいでもあるそうだ。

日本の学生は学内だけで授業を受けない。学生を連れ出しての学習もよく見かけられる。景勝地には、祖先の努力を見に行き、企業には、どうやって発展したかを見に行く。考えてみれば、時代についていけるか、社会の需要に適応できるかを見ているのだ。これは日本人の公共道徳教育や思想教育、ないし徳育と呼ぶべきものである。日本人は徳育を重視し、多くの投資をしている。参観した各地で最も多く見かけたのは小中学生だった。特に沖縄で多かった。ガイドの話では、日本政府が小中学校に手当を支給するため、教師が児童を引率して訪れるのだそうだ。日本の学生の服装を見るのも面白かった。全国で統一された様式らしく、女子生徒は一律でスカートにハイソックスと革靴、男子生徒は帽子をかぶり、いずれも濃紺や深緑などの暗い色だった。

日本の路上にはほとんどくずかごが見られなかった。ごみを分別するため、皆がごみを自宅に持ち帰るからだそうだ。それでくずかごは要らないのだという。しかし学校の中にはあった。これには私も感心した。街を歩いていて、捨てたいものがあってもすてる場所が見つからず、自分のバッグに入れてホテルに持ち帰るしかなかったからだ。

ビュッフェで食事をするとき、人々は食べ終わると自分でテーブルを片付けていた。こぼれたものは紙ナプキンで拭き、食器を集めて置き場にもって行き、椅子を元の位置に戻していた。タバコを吸う人も灰を散らかしたり吸殻をポイ捨てしたりせず、街中で吸うときには携帯用灰皿（大連理工大学の劉副館長と楊館長は日本から数個ずつ買って帰っていた）を持っていた。

日本の電車やバスの中では電話ができないそうだ。休んでいる人に影響を与える恐れがあるためだという。私たちはそういう車両に乗る機会がなく、専用車に乗っていた。全員が内輪だということもあってか、私たちのリーダーとガイドは電話をかけていた。

早朝に散歩をしていると、日本が確かに「先を争う」お国柄だと目に見て分かる光景と出会った。ドアが開くと、戸口に詰め掛けた人の群れが殺到して出てくる。地下鉄だけでなく、エレベーターも、見本市会場の出入口も……。地下鉄の駅では、通行人がさながら徒競走の選手のようで、私たち中国からの訪問者はかなり「置いていかれ」てしまった。私たちが中国のぶらぶらと歩く速さに慣れてしまったせいかもしれない。最も不可思議だったのは、エスカレータに乗っている日本人が「一分一秒を争っている」ことで、誰もが左側に立っており、右側は前へ歩きたい人の

ために空けてあることだった。左側に寄っている人は自覚して一直線に並んでいる。日本人とは何をしてでも優れた秩序をつくるものなのか！　　夜の 6～7 時にホテルに着く日もあったが、明かりの消えていないビルがいくつか見えた。ガイドによるとこれは残業で、残業手当のついていないものだそうだ。

(4) 日本人の礼節

私が目にした日本人の礼節は主に私たちが乗っていたバスでのものだ。何度か車を乗り換えたが、運転手はみな礼儀正しかった。下車時には日本語でお気をつけてと声をかけ、乗車時は会釈をするなど。私たちがいった商店やホテルの店員は更に礼儀正しかった。会釈、お辞儀、いらっしゃいませ、またお越しくださいなど。最も典型的だったのは、空港で、車椅子に乗った人が空港の女性スタッフに何か話しかけると、そのスタッフが空港ロビーで膝をついてその話に耳を傾けたことである。

ネットで見かけた文に、こういうものがあった。「人々は挨拶するたびに、会うたびに、双方の社会的関係を表現しなければならないというのがあった。ある日本人が他の日本人に対して「食べる」や「座る」と言う時、相手と自分との親密さや相手の年代に基づいて異なる語彙を使わなければならない。「あなた」という語も同義語がいくつかあり、場合によって異なる「あなた」を使う必要がある。動詞にもいくつか異なる語尾をつける。言い換えると、日本人はその他の太平洋民族と同様に、「敬語」を使い慣れており、話すときには適切なお辞儀もするということだ。

こうした動作にはいずれも詳しいルールや慣例がある。誰にお辞儀をするべきか理解するだけでなく、その深さも理解しなければならない。ホストの場合、ゲストの方が目上とみなされるため、適度なお辞儀の深さでは失礼となってしまう。お辞儀の仕方は多く、膝をついて両手を伏せ、額が手の甲につくのを最高とし、簡単に肩を動かしたり頭を下げたりと続く。日本人はどういった場合にどういった礼をすべきか、小さい頃から学ばなければならない。日本の礼節とはつまりどういうものなのか？専門的な研究が必要なテーマかもしれないが、私の印象としては、顧客やゲストに対する礼儀などはその相手に好感を与え、私もいずれにせよ悪くは思わない。他の人も同じように感じているはずだと思う。この点も私たちが学ぶに値する。

訪れた図書館でもそうだった。図書の貸出や返却の係には図書館の従業員でなく、業務のアウトソーシング先から派遣されてきている人もいた。日本人の仕事する態度はとてもよい。私たちの行ったレストラン、ホテル、図書館、商店では、決まって気を遣い親身だった。手伝いのできることは決して放置せず、手伝いのできないこともあらかじめ断って情報を提示する。こうあるべきなのだ。サービスの態度が非常によい。

(5) 日本の食文化

異なる国に来たのだと一番感じるものは食についてだろう。誰もが毎日直面することがらだからだ。国際肥満問題チームの最新統計によると、先進国のうち、フランス女性の肥満率は 11%、米国では 34%だが、日本ではたったの 3%で最も低い。このほか、日本女性の平均寿命は 85 歳で、最高である。イタリアとフランスが 84 歳、スウェーデン、スイスとオーストラリアが 83 歳である。

伝統的な日本食には魚、野菜、果物、米と大豆が含まれる。日本の伝統文化では「新鮮至上」を崇めているので、日本女性は魚や野菜、果物などを好んで多く買う。肉や菓子類、加工食品は余り買わない。ネットによると、日本では厨房が小さく食べ物の保存場所が少ないため、スーパーへ新鮮なものを買いに行く頻度が高いのだそうだ。反対に、米国では、何週間分もの食べ物を一度に買って冷蔵庫に入れてお

くのが好まれている。「腹八分目がよい」と言われており、これは余り食べ過ぎないようにということである。日本人はこの点で割とうまくやっている。日本人は一日平均 2700Cal を摂取するが、米国人の平均は 3700Cal で、両者には 1000Cal の開きがある。

食べ物に対する態度は中国でいう禅宗式で、最も新鮮な材料を選び、心を込めて料理する。食事をする時はがつがつ食べず、美味佳肴を嗜むと同時に、美しい献立の鑑賞も学ぶ必要がある。美しい外観は日本料理の命である。ネットでは日本人の長寿がいくつかの要素によるものだとあった。飲食や生活方式、緊密な社会と精神的な絆、発達した保健体系、他にも、遺伝や訓練によるものもあるという。西洋人と比べ、日本人はより散歩や自転車を好む。私たちが行ったところでも少なからぬ自転車が停めてあった。

日本人がよく生で食べるのは魚だけではない。牛肉、馬肉、鶏肉やエビ、カニ、貝類、野菜などもあり、水さえも生で飲める。私たちの食事にも毎食こうしたものが含まれており、味もいろいろあった。しょっぱさはそのうちの一つでしかなく、しょっぱさを主としながら元の食材の味を感じられるものが多かった。生ものを何日食べてもお腹を壊すことはなかった。これは日本人が清潔好きで、特に食品衛生に気をつけていることを証明している。

こうした気遣いは日本人の暮らしの随所に見られる。ネットで『環球時報』記者が書いていたのは、日本の大小スーパーで鮮魚を何度か買ったとき、日本のスーパーでは売られている魚が新鮮なだけでなく、スーパーが保冷用の氷を用意し、顧客の帰宅中に鮮度を保てるようにしているという。包装時に氷が要るか質問するスーパーもあり、氷箱を用意して自由に取れるようにしているところもある。日本では、鮮魚を買うときは一般に切り身なので、家に帰ってから洗わずに直接料理できる。洗う必要がある場合、店が包装上にラベルを貼り、洗ってから食べるように明記している。スーパーでは、よく「生ものですのでなるべく早くお召し上がりください」と書かれたラベルを目にする。刺身などの生ものは必ず当日中に食べるよう注意を促すものだ。

飲み物には清酒という米を発酵させて作る醸造酒があり、日本で千年以上の歴史を持ち「日本酒」とも呼ばれている。アルコール度は低めで、約 17～18 度。日本での洋酒は戦後、特に 70 年代以降に流行しだした。最も販売されているのはウイスキーである。よく氷や氷水を混ぜる。日本人が飲むビールにはキリン、アサヒ、サッポロの三大銘柄がある。中国の白酒のように度数の高い酒は少ないのか、見かけられなかった。私たちは何回か「飲み放題」、つまり量に制限なく各種の酒が注文できるところへ行き、それぞれ好きに飲んだ。

芝浦工業大学での茶道体験はチョット難儀した。大学生がしていたのだが、彼らいわくこうしたことを好む若者は少なくなったという。

参観の道中に買った飲み物には茶飲料もあったが、もともとの茶の味がするもので、砂糖などの添加物がなく、茶葉の原産地が中国というものもあった。朝に食べたヨーグルトもそのものの味がして、中国のように砂糖とかサッカリンのようなものはそれほど入っていなかった。

(6) 日本の図書館

五つの大学図書館を参観し、全体の印象としては静かで秩序があるという感じだった。当然、国会図書館の人は多かったが、後で訪れた瀋陽の開放式図書館のように学生だらけではなかった。キャンパス上のリソースが豊富で日本の学生が自習す

る場所も多いからかもしれない。

参観した芝浦工業大学、武蔵工業大学、成蹊大学の図書館はいずれも資金が潤沢で、中国のものとは比べ物にならない。机や椅子がイタリアから輸入したものだったり、自分でデザインしたものであったり特長的だった。椅子の背もたれを倒すと机になったり、ソファーの背もたれも自分の机にできたりした。ほかにも軟らかい素材で背もたれができた椅子もあり、座り心地が快適だった。武蔵工業大学図書館では、全ての図書とディスクにチップが貼ってあるのを見かけた。とても先進的なもので、借りたい本を卓上の機械に近づけるだけで読者のデータを表示し、すぐ貸出手続が完了するのでとても速い。

これらの図書館の共通点の一つに、正式職員が多くないというのがある。多くの業務がアウトソーシングされ、学生アルバイトが行っているものもあった。

参観した図書館の集中書架や書架上の照明は多くが感知式で、エネルギー節約意識がよく表れていた。

国会図書館の設立趣旨は、心理は私たちに自由をくれるという聖書の一節である。また、成蹊大学の学名の由来は『史記・李将軍列伝』の「桃李もの言わざれども下おのずから蹊を成す」が出典である。東西の文化からその精華を吸収して用い、自身を失うこともない。これは今日の日本のキーポイントであり秘訣なのだろう。

七日間という時間は瞬く間に過ぎてしまい、本当にざっと見ただけで深く入ることはできなかった。この 8 日間、日本科学協会のスタッフには時間の按配を尽くしていただいた。私たちが日本を多角的に理解し把握できるよう願ってのことである。並大抵の苦労ではなかっただろう。特に最後、大阪についてから、京都と奈良を見に行きたいと言うと、日本科学協会のスタッフはリクエストを聞き入れてくれた。おかげで私たちは日本の現代と過去を深く理解することができた。

再び日本に行くこともないかもしれない。私の見聞きして書いた感想は誇大だったり卑小だったりするかもしれないが、この七日間の印象は永遠に記憶に残り、絶えず反省を促す材料となるだろう。他山の石という言葉がある。中国は発展しつつある国であり、経済の面だけでなく、文化や教育そして国民の素養により多くそれが表れている。私たちの道のりは長い。

隣国を友とし、隣国と善くするのは中国の重要な国策である。日本は中国の隣人であり、流れを同じくしている。浮雲に目を遮られることなく、中日友好が永遠に名声を残すと信じている！

2006.12.25

大連海事大学図書館 副館長　那春光

「第４回中国大学図書館担当者訪日団」訪日感想

— 真理がわれらを自由にする —

日本科学協会の招請を受けて「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」一行 27 名は、2006 年 12 月 4 日～12 月 11 日に日本を訪問し、視察と交流を行った。訪日団の一員として今回の交流に参加できたことを光栄に思った。日本滞在中、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館、国立国会図書館を見学した。特に、国立国会図書館と琉球大学図書館を見学した際に二つの図書館は同じ館訓――「真理がわれらを自由にする」のを掲げていることに驚いた。繰り返しその意味を噛み締めたが本当に意義深いものだと感じた。そして日本滞在期間に感受した、点滴ではあるが個人の体得もこの理念にまとめられると思っている。

1.　図書館――読者は真理を求めて自由を手にいれる殿堂

各図書館を見学して最も印象的なことは「すべて読者のため」というサービス理念である。見学した 5 つの図書館は自らの性格に基づいて豊富な文献を集めた。図書館の各階に読者検索用の端末、セルフサービスの複写機、プリンターを設置した。琉球大学図書館には読者が検索結果を記録するために検索端末のそばにメモ用紙を用意した。武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館は、読者の情報交流を重視し、館内に公共学習室を設けた。予約により読者は無料に利用することができる。国立国会図書館は読者に影響を与えないように見学者の撮影禁止を規定されている。図書館の見学を通じて読者本位や手細かなサービスは日本の図書館サービスの特徴になっている。ジャーナルラックに消音を施され、日、英、中、韓等多言語のガイドブック等、各図書館のバリアフリー、目の不自由な読者のための音声ガイドや文献閲覧器等きめ細かに配慮されている。日本の図書館においては「倫理綱領」に基づいて氏名、住所、所属会社、職業、行動記録、利用回数、読書事実、参考、相談記録、購読記録、図書館資料の複写記録等を含む読者のプライバシーを保護されている。これらすべては読者の購読需要と図書館の利用権利への尊重である。

その他に「真理がわれらを自由にする」文化的雰囲気作りを通して投機的な行為や巧みに卑俗な行為を拒否し真の才能と学問を身に付けるよう読者を激励している。

2. 文献を大切に保管し、文献を重宝する手本

「真理がわれらを自由にする」。ここに「真理」とは、一方では客観的事実及び規律が人々の意識に正確に反映されることを指すが、他方では人々が認識した客観事実及び規律の物質化、すなわち文献を指す。日本の図書館は文献の保管と、文献の展示を非常に大切にしている。見学した 5 つの図書館には珍本善本等精美な文献を大切に保管し、ガラスケースに収めている。成蹊大学図書館には後漢書（古活字版）、竹取物語（古活字版）、百富士（天明 5 年刊）、潮来絶句（享和 2 年跋刊）、航海術等が大切に保管されている。琉球大学図書館には仲吉本（古琉球歌謡）、琉球人行列図（錦絵）、琉球日記、沖縄写真帳等貴重な蔵書が大切に保管されている。これらの貴

重な図書等の保管と展示により図書館内に濃厚な図書文化が漂われている。本を大切にし、蔵書を活用することによって知識を求め、自由を求める読者を激励する。図書館の蔵書はすべての読者に共有される性格があり、真理の門はすべての読者に開けている。図書館はすべての読者に同じ情報を提供している。言い換えれば真理を獲得する機会はみんな均等であるが自由を手にいられるかは読者自身の努力に任せることを意味する。

日本の図書館において珍本善本が大切に保管され、利用されている現状を見て中国の図書館業界における「重蔵軽用（保管を重視し、利用を重視しない)」への反省及びその影響は一つの極端からもう一つの極端に走ったのではないかと深く考えさせられた。

3. 司書資格制度による図書館サービス水準の維持

日本の「図書館法」には図書館就業者に関する資格認定の規定がある。1950 年に公布された「図書館法」第 5 条　司書と司書補、第 6 条　司書及び司書補の講習、1968 年に公表された「図書館法実施規則」第 1 章は 9 条からなり、「司書と司書補の研修」における図書情報に関しては必須科目と研修科目、取得単位、考査、認定等を規定されている。2001 年に日本の「図書館法」は改訂され、司書資格試験の合格ラインは更に厳しくなり、図書館就業者の資質を厳しくした。日本の図書館就業者の資格制度により一定の学歴を有し、図書館情報学の関連科目を履修した人を図書館に就業することにより図書館員の資質を保証し、高水準のサービス提供を保証されている。図書館員は社会から認められ、尊重される。同時に高い待遇を受けている。

インドの図書館学者ランガナタン(Shiyali Ramamrita)は「図書館員が個人の資質を図書館に持ちこむことにより図書館が活力に満ちる」。「図書館には活力がないことは、スタッフがいても図書館員がいないことだ」と指摘した。図書館業の歴史という視点からも切実で実行できる措置を以て図書館員を育成すること自身も一つのルールであり、「真理」といえよう。この「真理」を理解し、この「真理」を実践すれば図書館サービスの質を保証し、図書館事業は「自由」の境界に導くことができる。

4. 建築物と設備が図書館文化である

見学した私立大学図書館の館舎はすべて新築である。建築のデザインには濃厚な図書館文化が込められている。武蔵工業大学図書館は自然と文化の融合という理念に基づくデザインとなっている。図書館の内装と家具は木質の材料で統一した。自然、豪華な印象を与えている。人間が木質の環境の中で読書の効果が一番よく記憶力と集中力が高められると説明してくれた。気持ちが伸び伸びとした学習型の図書館を目標にしている。読者は本に囲まれ、どこからでも本が選べる。閲覧席が本棚に近く、館内に無線 LAN が使われ、非常に便利である。音楽が流れている中、ゆったりとした、暖かい雰囲気が伝わってくる。

芝浦工業大学図書館は、白と黒の色彩を使用し、厳かで重々しく、静粛で優雅な視覚が得られる。館内に世界著名なデザイナーによりデザインされた家具が陳列さ

れ、家具のそばにデザイナーの氏名とその人物のプロフィールが書かれている。これらの高価な家具の価値は家具自身の価値を超えたものであり、読者に創作のヒントを引き出すのに役に立つに間違いない。

成蹊大学図書館は、鉄鋼フレームに大量のガラスを張った館舎は、ユニークな空間造形と釣り合っている。その中に身を置かれて宇宙に来た感じである。思想が活発になり、インスピレーションが飛び出すのではないか。ガラスと鉄鋼構造が完璧に融合されて成蹊大学図書館はまるでデザイン藝術の殿堂である。ガラス張りは透明で明るい。各閲覧室の造形がそれぞれ異なり、椅子の造形も精美そのものであり、美を楽しめる。

見学したすべての大学図書館はネットワークシステムと厳しいセキュリティーシステム及び便利でかつ快速な公共サービスシステム（コピー、プリンター等機器がネットワーク化されている）を整備されている。そして自動貸出・自動返却システムもある。書庫には換気設備、音声警報システム、そして煙警報装置、CO_2自動消火システムを含む消防設備がある。通路の要所には緊急システムと簡潔な利用方法に関する説明文がある。特に触れなければならないのは武蔵工業大学図書館、成蹊大学図書館及び国立国会図書館等 20 以上の図書館は自動書庫、自動図書転送システム及びそれらを管理するシステムを利用して低利用率の一部の図書を管理することによって人件費を節約すると共に図書館貸出業務の効率化が図れた。武蔵工業大学図書館内に図書カードによるノートパソコン自動貸出システムがある。高水準で現代化されたシステムと設備は、読者に利便性をもたらしたのみならず、大量の人力を省いた。これらのシステムへの投資額が高いが比較的高水準の日本の大学図書館の現代化が反映されている。

日本の大学図書館の建築風格と家具は、現代化、多様化、特色化になっている。図書館の建築と設備は図書館文化の重要な構成部分と化している。読者を啓発し、創造性を高め、安静に閲覧するのに重要な役割を果たしている。

5、科学的に、高効率に、謹厳に管理

図書館業務の下請けは日本の図書館業務管理における特徴である。視察を通じて見学した 4 大学図書館は教職員数と学生数に対して正規な図書館員と蔵書が非常に少ないことに気づいた。図書館の人員配置において効率を求めた。武蔵工業大学図書館は図書の目録編集を専門の目録編集会社に委託し、図書流通等の業務を専門の人材会社に委託した。自動貸出、自動返却システム、無人書庫システム等の先進的技術と設備を借りて図書館員の作業量を著しく削減した。それによって図書館員は時間と精力をより高水準の情報サービス改善に集中できる。我々が見学した図書館には司書資格を持つ館員が 8～9 名しかない。その他に図書館は学生アルバイトを活用して人件費を節約しただけではなく学生にも図書館を理解し、活用する機会を与えた。

図書館を見学する時間は非常に短かったが、些細なことから日本の図書館の管理が非常に厳格に確立されていることを実感させられた。武蔵工業大学図書館を見学した時のこと、訪日団は海外からのお客さんとして熱烈な歓迎を受けたが、図書館

内で昼食をとることはなく、道路を渡った別の棟の会議室で弁当を食べたのである。客だからといって特別扱いすることはなく、読者と同様、訪日団にも飲食禁止の規定が適用されているのである。しかし、他方、規定制度を真面目に厳守するだけでなく、温か味のある利用者への配慮も失っていない。図書館に入る通路の両側に利用者のための飲食エリアがある。利用者は食べ物を持ってくるか、或いは飲食エリアで買って食べることができる。下請けにしても、規定に従うことにしても図書館管理における客観的発展の規律に合致している。従って実行中に非常に良い効果が得られた。これも「真理がわれらを自由にする」ことだろう。

参考文献：

1.『図書館学５定律』ランガナタン(Shiyali Ramamrita)著、夏雲等訳、北京書目文献出版社、1988：15.
2.「大学図書館発展のボトルネック：制度的欠陥」甘明、大学図書情報フォラム、2006（4）：8－11

遼寧対外経貿学院図書館館長　趙　国林

日本の大学図書館視察記

東の隣国である日本に渡って 8 日間の滞在中、とても感想が多く感銘が深かった。

日本科学協会の招請を受けて「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」一行 27 人は、12 月 4 日～11 日に日本を訪問した。日本滞在中、日本の大学図書館を視察し、日本の文化を体験した。笹川陽平日本財団会長、濱田隆士日本科学協会理事長及び日本科学協会の担当者達、特に、教育・研究図書有効活用プロジェクト室の担当者達の支持と手配により、我々の訪日は実り豊かなものとなり、大変成功した。日本滞在中に日本財団、日本科学協会、日本の 4 大学の図書館、国立国会図書館等から熱烈な歓迎を受けた。日本科学協会の細心な手配により日本の大学図書館、国立国会図書館を訪問してこれらの図書館と良好な関係を作り、多くの経験を学んだ。その他にも訪日団は日本の文化を体験し、日本の文化に対する理解と認識を深めた。

中国の大学図書館の担当者として日本の大学図書館の経験を勉強し、参考にすることは極めて重要である。私本人も日本の大学図書館について一層興味を持ち、日本の大学図書館のすべてを分析し、考察することについて多くの精力を投じた。視察した 4 大学図書館、すなわち武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館に関して以下のような認識を得た。

1.　高水準の現代化

4 大学図書館とも現代化水準が高い。整備されたネットワーク、厳しいセキュリティーシステム、便利で迅速に対応できる公共サービス（複写機、プリンターのネットワーク化）の他に、自動貸出・自動返却システム、自動伝送システム、移動本棚等がある。これらの現代化システムは中国大学図書館の一部において配置されているが、自動伝送システムや移動本棚はまだ殆どない。高水準の現代化システムと設備の存在は、読者に利便さを与える同時に大量の人力を省いた。これらのシステムへの投資費用は高く、日本の大学図書館の現代化の水準の高さを示している。

2.　科学的な管理

4 大学図書館はそれぞれ独特な管理方法を実施しているが、4 大学図書館は科学的な管理を実施している。

まず、図書館の人員配置においては極力無駄を省いた。各図書館には通常司書資格を持つ管理者 8～9 人がいる。その他の人員はすべてアルバイト学生（学部生、修士課程院生、博士課程院生）である。人件費の支出を節約するだけでなく、アルバイト学生達に図書館を熟知し、図書館を利用するチャンスを与える。アルバイト学生は図書館に関する情報を仲間達に伝え、図書館の利用率を高める目的もある。

次に、管理面における読者本位である。より良好な学習環境と研究環境を提供し、心や目を楽しませることにより読者の学習欲と研究欲を一層引き立てるため、木質の内装材を使って読者に暖かさを感じる環境を整えている。(図書館館舎の)造形芸術は読者に美を感受させる。どこからも本がとれる。どこにいてもインターネットが利用できる。どこにいても図書館員から助けてもらえる。どこからも必要とする

資料を手に入れ、利用しようとする設備が利用できる。

第三に管理の細やかさである。どこに身を置いていてもよく誘導してくれる。さまざまな指示、宣伝資料、業務ガイダンス等は図書館内の目の届く場所に置いてある。読者に利用しやすいだけではなく図書館の文化の一つでもある。

第四に優雅な環境、精良な設備、精巧なデザイン、整然な秩序である。

3. 鮮明な特徴

4 大学の図書館は(館舎の)精巧なデザイン、精良な内装、特色のある蔵書等を以てそれぞれの特色としている。

武蔵工業大学図書館は、心静かに伸び伸びとした学習型の図書館を目標にしている。そのため、内装にはすべて木質材料を使われた。本に囲まれている読者がどこからも本が取れる。閲覧席も本棚に近く無線 LAN が接続できる。音楽が流れている中で読者が伸び伸びとした環境の中において暖かさと利便さを感じる。

芝浦工業大学図書館サービスの特色は、鮮明な印象を残してくれた。茶道の実演を観賞し、茶道の厳かで重々しさ、静粛さ、優雅な雰囲気を楽しんでいた。茶道も読書も同じ趣旨だと思った。心を静めて茶を楽しみ、心を静めて読書を楽しむ。その楽しさに勝るものない。

成蹊大学図書館は、まさにデザインと藝術の殿堂である。図書館建物全体はガラス張りであり、透明で明るい。各閲覧室の造形は異なり、椅子の造形も精美で美を楽しむものである。

琉球大学図書館は中国の大学図書館に似通っている。発展段階も中国大学図書館に近い。しかし、琉球大学図書館は琉球に関するすべての文献と資料を収集しており、琉球資料の整備を以て図書館の特色としている。豊富な琉球資料は世界各地からここに集まり、読者や研究者が利用している。

以上、4 大学の図書館に関する印象をまとめた。これらは、中国の大学図書館の参考に値する。特に、私立大学である我が遼寧対外経貿学院の図書館にとって、図書館の建設全体に関して日本の大学図書館の経験を吸収し、生かすことは極めて重要である。遼寧対外経貿学院図書館館長として「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」の一員として日本で感受したことは、日本人の勤勉な勤務姿勢や日本文化の特色だけではない。一番収穫が多かったのは、日本の大学図書館の優位性から自らの図書館業務をより良いものに改善していく自信と決心ができたことである。

笹川陽平日本財団会長、濱田隆士日本科学協会理事長、梶原義明先生、三浦先生、及び友人の皆様、本当にありがとう。

我々の見学と視察を協力してくれた 4 大学の図書館、国立国会図書館の皆様、本当にありがとう。

特に、今回の訪日のためにいろいろ苦労された日本科学協会の担当者に感謝しなければならない。

われわれの友情が末永く続くよう、そして日本科学協会事業の発展、友人の皆様のご健康とご活躍を心からお祈りする。

2006 年 12 月 19 日

清華大学図書館 館員 晏 凌

「第四回中国図書館担当者訪日団」参観のまとめ

私は日本の財団法人、日本科学協会の招待に応じ「第四回中国図書館実務者訪日団」に参加した。その活動は、日本科学協会が実施している「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の重要な一部で、2001 年から 2005 年までに 3 回行われた。その趣旨は中国の図書館員にこのプロジェクトの組織と実施状況を紹介し、双方の交流を強化して、プロジェクトのよりよい推進を目指すというものである。同時に実際の考察を通じ、中国側の館員は日本の図書館界で起きている発展や変化、日本の社会や文化が持つ特徴が理解でき、日本人が友情を重んじ、友好を続けていこうと望む真摯な心を感じ取った。

訪問団が日本滞在中に行った主な活動は、日本財団、日本科学協会幹部の表敬訪問、図書館 5 施設の視察（公共図書館、大学図書館など）、科学技術や文化研究に関する機関の視察、文化古跡や自然の観光などである。

1. 日本の図書館における建築構造の斬新さ、設備の先進性、人本主義精神の表現

大学図書館か公共図書館かを問わず、中国での状況と比べると、日本の図書館はいずれも高い経費予算が組まれている。この点は文献資料の購買能力だけでなく、建屋や一通りの先進的な設備にもよく現れている。私たちが視察した図書館は、例外なく斬新な建築構造であり、広々とした閲覧スペースや充実した検索端末を備えており、中国国内の読者（公共閲覧エリア）と国書（書庫）とが空間を奪い合う苦境とは明らかに対照的である。

これらの図書館は基本的に全て新築されたもので、集中書庫や無人書庫ないしその管理システムを備えている。これは中国国内の図書館が蔵書の停滞を解決するのに参考となる。このほか、各図書館の書庫が科学的かつ合理的に通風換気装置、音声警報装置、煙感知器にとどまらずガス(CO_2)消化システムなどを備えた消防設備を備えており、通路の主要位置には非常時システムとその簡単な使用説明が設置されていた。

図書館業務を専門会社に委託するのも現在の日本の図書館では流行している。視察した中で、4 大学の図書館では正規職員が大学の教員や学生の人数、蔵書に比べて非常に少なく、彼らは図書目録業務を目録の専門会社に委託し、閲覧図書の流通などは専門の人材会社に委託し、貸出返却の自動システムや無人書庫システムなどの先進技術や設備も利用し、大幅に館員の業務量を削減している。これにより館員は時間と力をリファレンス問い合わせなどの高度なサービスに集中できるのだ。これは私たちが中国の図書館を将来発展させる情勢のとき参考となる現実的なオペレーション例である。

他の先進国と同様、日本でも既に成熟した公共図書館体系が形成されている。公共図書館のサービス対象は幅広く、証明書申請方法も手続きも簡単である。特に小児や障害者などの文献ニーズを考慮している。公共図書館は文献を提供するサービスと大衆の文化的素養の涵養という二つの分野で同等に重要な働きをしていると言える。同時に、日本の大学図書館がここ数年行っている「大学図書館を開放し、地域社会にサービスする」試みや研究レポジトリ(Institutional Repository)の設立は、社会の人々が知識情報を得る方法と経路をより充実させ、一般大衆の文化的素養を向上させる重要な作用がある。

日本の図書館に対して深く感じたことは他にもあり、それは細かくも濃厚な人本主義精神の表現である。サイレント処理がされた定期刊行物書架や、日英中韓といった多言語で書かれた小冊子など。各図書館がほぼ全てで、障害者専用の通路、表示装置や文献閲覧補助器などを設置していた。読者に対する尊重と思いやりに基づき、館員は閲覧中

の読者が参観者の干渉を受けないよう、合理的に訪問者の写真、動画撮影を制止している。真に「読者が一番」の理念を体現しているのだ。

2.日本文化の体験

訪問中、代表団は行った先々で心のこもった対応をいただいた。簡単な会話だけでも、私たちは日本人の友好と誠実さを感じ取れた。限られた参観の中で、日本人の勤勉さ、入念な仕事ぶりを理解できた。

「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の配送センターとなっている倉庫の参観では、多種多様な図書が大量に保管されていたが、一つ一つの業務プロセスが整然としており、乱れた形跡が全くなかった。従業員の応答も雅やかで礼儀正しく、原則を重視しており、規則制度に反する要求にはほとんど応えなかった。

東京では、浅草の日本伝統食品や物件に中国文化からの深い影響を見ることができた。秋葉原では百花繚乱の IT 製品が、日本の先進技術をありありと感じさせてくれた。沖縄では、琉球大学図書館を訪問したほかに、歴代の琉球王が住んだ首里城の観光にも行った。沖縄の美しい景観と素朴な民間風俗も、深く印象に残っている。琉球の歴史と首里城の由来は中日文化の交流と融合の歴史の長さを感じさせた。

京都では幸いにも金閣寺、清水寺などの寺院を参観して回り、京都の町並みの古風で質朴な姿も味わった。古跡を大事にして、保存もきちんとしている。京都はちらりと見ただけで、日本の古い文化に対する重視姿勢を感じ取ることができた。そして、何ということなく傷つけられてしまった中国の歴史遺跡を思い心が痛んだ。

3 今後の訪日活動についての個人的提案

私は財団法人日本科学協会が中国図書館担当者の訪日に招待してくれて非常に感謝している。私個人の実体験と業務経験から考えると、より多くの時間、図書館界の学者や実務者との交流ができ、より多くの図書館専門家の講義を聞け、具体的な問題について討論できたらと思う。日本の図書館を訪問するのも交流と討論が主になればと希望する。

2006 年 12 月 25 日

南京大学図書館 館長　洪修平

訪日感想

2006 年 12 月 4 日～11 日、日本科学協会により細心に組織し、手配された「第 4 中国大学図書館担当者訪日団」の一員として日本を 8 日間訪問した。8 日間に東京、沖縄、大阪、京都、奈良等を訪問した。今回の訪問の主要目的は中日双方の相互理解と協力を強化し、寄贈図書が教育、学習、研究において更に役に立つために日本科学協会の「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の実施状況を視察することである。その目的により日本滞在中に「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の助成を提供する日本財団を表敬訪問した。武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、国立国会図書館、及び琉球大学図書館等特色のある日本の大学図書館を見学した。京都、奈良等日本の文化古都を見学した。今回の訪日は時間が長いとはいえないが見聞したこと、印象に残ったこと、感じたことが少なくなかった。

まず、日本の友人の中国人民に対する友好は感動的なものであった。日本科学協会は 1999 年から日本財団の助成を受けて「教育研究用図書有効活用プロジェクト」を実施してきた。南京大学は最初の受贈大学の一つである。近年来、内容が豊富で多分野に及ぶこれらの図書は南京大学の教育と研究に大いに役に立っている。これらの図書は中国の大学生が日本の社会、歴史、文化を理解する窓口になっている。笹川陽平日本財団会長を表敬した際に日本財団の「教育・研究図書有効活用プロジェクト」、「ヤングリーダ奨学基金」「笹川日中友好基金」等中日両国の相互理解、協力と交流強化のための事業についてより一層の理解ができ、日本の友人の皆様の中国人民に対する友好感情は伝わってきた。日本滞在中に日本科学協会の図書プロジェクト室担当者は最後までわれわれをご案内してくれた。梶原義明日本科学協会常務理事はわざわざ空港までわれわれを出迎え、見送りしてくれた。至れり尽くせり、周到な手配をしてくれた日本友人の友情をしみじみ感じた。

次は、日本の友人達が「教育・研究図書有効活用プロジェクト」のためにきめ細かい大量の作業を行われたことについて感動したことである。日本へ出発する前までは日本科学協会が毎年中国の大学図書館に大量の図書を寄贈していることだけを知っていた。しかし、図書寄贈のために日本友人の皆様がなされたきめ細かな大量作業の苦労は知らなかった。視察の中で寄贈図書の収集、選択、分類、梱包、発送の全過程を自らの目で確かめた。図書倉庫を視察した際に梱包が終わって南京大学へ発送前の図書を見た時、大変感動した。寄贈図書の具体的作業を自ら確かめ、今後、これらの図書を大事に扱い、これらの図書をより大きい役割を果たすよう工夫しなければならないと思った。

その次は、日本の図書館の現代化施設及び読者第一のサービス理念はとても印象的であつた。訪日団メンバー全員は中国の大学図書館担当者である。そのため今回は日本の大学の図書館を多く見学した。武蔵工業大学図書館（館舎の建築デザイン）は自然的な純朴さで印象に残った。芝浦工業大学図書館（館舎の建築デザイン）は芸術性が高い。成蹊大学図書館の書庫内の取出システムは高度な現代化を実現された。琉球大学図書館は東方文化を特色にしている。これらの特色はわれわれの視野を広げた。

中国における建設予定の新しい図書館に多くのヒントを与えた。日本の各大学図書館は情報化時代に相応しいネットワーク化、読者第一のサービス理念等様々な努力はわれわれの多くの参考となった。例えば大学図書館は社会への一般公開は大学図書館の蔵書資源を十分に活用すると共に社会における大学のイメージ向上にもつながる。また図書館は学習と研究の公共の場として提供されている。公共学習室の利用規定には絶対な静粛を要求しないと書かれており、ネットワーク時代、デジタル時代に相応しく整備することにより多くの読者を引き付けて図書館を活用されている。これらは読者に良質なサービスを提供する有益でかつ新しい試みである。

その次の次は、中日両国人民の友好交流の歴史と、日本の伝統文化と現代社会の融合についてとても印象的であったことである。今回の訪日においては図書館自体だけではなく、芝浦工業大学の学生達の「茶道」を体験し、遠くから「皇居」を見た。沖縄の「首里城」を見学し、「琉球舞踊」を観賞した。

特に、現代化大都市、繁華街の東京を訪問した後に、風格一変した京都と奈良といった文化古都を訪問した。伝統と現代が融合された日本のことをより全面的に把握した。京都と奈良の古都文化は共に千年以上の歴史がある。日本の伝統文化と建築の一部は世界文化遺産として現在でも保存されている。しかもこれらの伝統文化と建築は中日両国人民の友好往来の歴史を立ち会ったものである。二つの古都の最初の設計は中国唐の時代の長安を参考にした。京都と奈良のいたるところに仏教寺院があり、すべて中国から伝来された仏教の宗派である。例えば京都の金閣寺は仏教臨済宗の寺院である。奈良の東大寺は華厳宗の本山である。中国から日本に来た高僧鑒真はここで授戒したのである。特に奈良の唐招提寺は中日文化交流の史話について多く記載されている。—中国唐の時代の高僧鑒真和尚は日本を 6 回渡った苦労、失明した後にも志を移さず、とうとう中国の仏教律宗を日本に伝えた。同時に鑒真和尚は唐の時代の書道、絵画、彫刻、医薬、印刷、建築等文化を日本に伝えた。中日関係の発展と文化交流のために重要な貢献をなされた。鑑真和尚は心をこめて設計し、建設した唐招提寺はいまや中日友好交流の歴史を偲ぶ重要な場所となっている。

最後に、最も印象深かったのは、日本科学協会の教育・研究図書有効活用プロジェクト室は真剣に、心細かく、心を込めて仕事に取り込んでいることである。日本へ出発する前に担当者は訪日の日程、注意点等を詳細に説明してくれた。そして「中国における日本財団の主要事業」、「日本大学図書館の現状」等の資料を送ってくれた。出発前に周到な準備が出来たので、それが今回の訪日の成功につながった。見学と訪問の全過程において担当者はわれわれのことを配慮し、周到に手配してくれた。至れり尽くせりそのもので本当に感動して止まない。京都と奈良の見学等一部の日程は図書館業務と直接に関係していないかも知れないと思っていたが、実はそうではなかった。図書プロジェクト室のこのような細かい手配により短い一週間で日本についてより全面的な理解ができて多くの成果があったのである。簡単に「ありがとう」の一言で感謝の気持ちを言い尽くせない。この感謝を今後の仕事に反映して中日両国人民の友好交流に特に図書に関する文化交流と協力に貢献したい。

江南大学図書館図書館 副館長 陳敏娟

「第 4 回中国大学図書館責任者訪日交流」中間報告

1. 収穫

(1) 日本財団および日本科学協会の基本を理解

今回の交流行事を通して、日本財団と日本科学協会の関係を理解し、教育・研究図書有効活用プロジェクトを除く日本財団の支援事業について理解を深めた。1999 年以来、日本科学協会が日本財団の全面的支持を得て開始したプロジェクトで、今までの 8 年間、中国の 24 大学図書館に 151 万冊余りの図書が寄贈された。中国国際友好連合会と協力、協議による事業には他に、日中笹川医学奨学金制度、優秀青年奨学基金、ハンセン病予防治療プロジェクト、日中両国鉄道発展プロジェクト、中国ゲートボール発展支援事業、世界海事大学奨学金事業、中国の国際関係学研究推進、太平洋諸島国家の訪中などがある。これらを知って、日本財団の創始者である笹川良一氏および現任会長の笹川陽平氏の親子が日中友好に傾けられていた情熱に深く敬服し、日本の慈善事業の発展にも感心した。

(2) 日本の図書館についての感想

①図書館数館の概況

a.国立国会図書館

(a) 1948 年設立、国会に属しており、運営経費はすべて国家負担。

(b) 独特の建築(地下 8 階)

b.武蔵工業大学図書館(私立)

(a)特徴:サービス充実(本の返却催促、到着を自動 E メールで通知)

(b)光っている点:・人間味ある設計(全館が木造で、BGM あり)

・メディアライブラリー(電子資料が充実、PC120 台設置、ノートパソコン貸出可)

・小型会議室(読者が予約制で使用可)

c.芝浦工業大学図書館(私立)

(a)特徴: ・現代建築、全面ガラス張りで採光十分

・免震構造

・教室外の廊下、図書館内が全面カーペットで静か

(b)光っている点:図書館のある研究棟が教室と連なっており、図書館はビルの中間フロア(15 階建ての 8 階)にあって読者に便利。

d.成蹊大学図書館(私立)

(a)特徴: ・校名は司馬遷の『史記』に由来。

・中国語教育に力を入れており、文科省の委託を受けネット上での中国語教育を展開

・建築は現代的で、特に五つの丸いガラス研究室が二大機能を担っている。電子メディア、先人の知識遺産保存

(b)光っている点: ・自動書庫、2 億円を投資、貸し出しに 3 分間かからない

漢籍が多く、『後漢書』(古活字版)もある

e.琉球大学図書館(公立)

(a) 特徴: ・エリアが細かく分かれている

・地方史などの中国に関する蔵書も多い

(b)光っている点： ・社会に解放されている
・視聴覚エリア

②日本の図書館に学ぶべき側面

（a）人間味のある設計

各図書館の設計はまるっきり違っているが、設計思想は人を基準にしている

（b）先進的なサービスと管理

・サービス品質を保証するため、図書館の正規職員は国が発行する司書証書が必要である。

・大学図書館を開放し、地域社会にもサービスをしている

（c）節約意識

・新設の図書館は形式的な大きさを追求せず、機能とサービスを磨いている。

・閲覧用の照明はスタンド式で省エネ

（3）中国と日本に流れる文化の血脈

沖縄の首里城公園、京都の清水寺および金閣寺、奈良の東大寺および唐招提寺などの古跡を観光し、日本の寺院と中国との源にあるものを理解した。特に唐招提寺。あいにく、本殿はちょうど大修理の最中だったが、この寺院の創設者が中国唐朝の鑑真和尚で、彼の布教は日本の仏教史だけでなく天平時代の文化にも大いに影響し、日本文化の発展にも大きく貢献したことが分かった。この寺院の境内は鬱蒼とした緑と本殿の大改修とのコントラストが、「鑑真の死後千二百年間も祈りの火は消えていない。鑑真和尚こそがずっと崇拝の対象なのだ」と思わせてくれた。

（4）日本人に学ぶべき側面

①仕事への熱心さ

日本科学協会からの招待状から、訪日日程の終了まで、いかなる時も至る所で日本人の熱心さに触れた。日本側の水も漏らさぬ日程の手配、つききりの送迎、熱心で積極的な案内、厳格な仕事ぶりや辛苦を厭わぬアテンド、最後の一人が帰るまで見送っていた姿。特に中国の国情に合った本を選ぶため、日本科学協会の担当者が空調もない倉庫で忙しくしていたこと。

②人への敬意

細かいながら二つのできごとが、私の日本人に対する先入観を覆してくれた。日本人の人への敬意も感じた。一つは、武蔵工業大学図書館の視察時。計画では、館長が歓迎の挨拶をしてから担当者が図書館の概況を紹介するはずだった。私たちが予定より 10 分も早く着いてしまったため、館長がまだ授業中で図書館にはいなかった。図書館は私たちを待たせないためにと先に概況を案内し、館長の挨拶を後回しにしてくれた。もう一つは、日本財団と日本科学協会を表敬訪問したとき。渋滞で、笹川陽平会長が時間通りに到着できなかった。先に来ていた濱田隆士財団理事長と三浦一郎常務理事、梶原科学協会常務理事が先に講話をしてくれた。

③最も深く感じたこと

一冊一冊の寄贈書はありがたいもので、私たちはこれらの資源を大事にすることしかできないが、十分に利用して最大限に活用しないと、こうして貢献してくれた全ての日本の友人に申し訳が立たない。

2.残念だったこと

（1）訪問時間が短い割に視察場所が多く、各地に滞在できる時間が非常に限られていた。そのため、表面をざっと見るぐらいしかできず、目にしたものは多かったが、深い理解まではできなかった。

（2）訪問者が多かったため、通訳の皆さんが尽力してくれたが、言葉の壁が中日双方の深い交流にはやはり影響してしまった。

2006 年 12 月 18 日

上海交通大学図書館 館員　徐英祥

訪日の感想

2006 年 12 月 6 日、私は日本科学協会の招待する中国大学図書館の日本訪問視察交流に参加した。当日の午後に東京へ着き、一行 27 人は全国 24 大学の図書館と関連機関から来ていた。訪日中は日本側の心がこもった対応を受けた。より忘れがたいのは全体のスケジュールが視察団の性質を考慮したものだったことで、日本の大学図書館の視察と学習の手配が非常に充実していて、私たちにぴったり合っており、多くのものを得ることができた。本学の図書館は新築中で、今回の日本視察と研学、日本の大学の現代化した図書館を参観できたことは、まさに千載一遇の機会だった。同時に、日本科学協会の図書プロジェクトの意義と運営、日本側の勤勉な仕事についてよりよく理解することができた。こうした図書はかけがえのないもので、本学の図書館が日本の図書寄贈を受けられるのは幸いなことだという認識を大いに深めることができた。これらの寄贈図書はきっと本学の教育研究において積極的に力を発揮するだろう。ここに深い謝意を表したい。

今回、視察の時間は長くなかったものの、深く感じるところがあり収穫は大きかった。日本科学協会の図書プロジェクトへの理解も、今後こちらでのプロジェクト運営をよりよいものにすると思う。本学図書館の日本語書籍は決して多くないので、日本側の図書寄贈プロジェクトを非常に必要としている。これらの寄贈図書は図書館の蔵書を豊かにするだけでなく、本学図書館の日本語書籍不足を補うものでもある。さらに、より重要なのは、本学の学生や教員がより多くの日本語書籍を目にすることで、より広汎な科学技術を学習できることである。これらの寄贈図書をどのように活用し有効に利用するかが私たちの今後の業務で重要な項目の一つである。

日本の大学図書館を視察しての研学中、いくつかの図書館はここ二年ほどで新築されたものであるが、日本の大学図書館における現代技術の応用ぶりを見ることができ、本学図書館の新館建設にもよい参考となった。図書館 IC カードの使用という面では、本当に一枚のカードで何でもでき、管理、貸出、流通、相談、複製など、読者に絶大な利便性を提供しており、また図書館の現代化の基礎にもなっている。成蹊大学の図書館では、スペースシャトルのような小型会議室に通してもらった。まるで時間を超越したような空間だった。一組一組の学生がこうした「スペースシャトル」内で学習討論や専門講座に参加しているのを見て、学生たちの発想が飛躍したり科学技術発展に憧れたりしているのかと想像してみた。先進科学の開拓精神のようなものが感じられ、とても興奮した。

日本の大学図書館はどこでも先進的な集中書架を使用しており、図書の保存と検索に極めて便利だ。本学図書館の建設でもこれを考慮できないかと思っている。各大学図書館の参観中、人間味のある設計が多いのにも気が付いた。照明の使用、閲覧座席の設計、電源プラグ、コンピュータ利用など、多くが周到に読者を気遣ったもので、一つ一つ記録しておけば、本学図書館の新館建設にも大いに参考になる。

サービスの面でも日本の大学図書館はすばらしかった。私たちも各図書館の関係者と十分に交流を行った。現代化された設備、優れたサービス、豊富な蔵書と、日本の大学図書館は大いに力を発揮しており、比べてみると、中国のサービスはだいたい意にかなっている程度だ。現代化した設備はお金で買えるが、よりよいサービス、読者のための考慮、図書館を最大限に利用するという理念などはそうはいかない。この点も今回の視察で深く理解した。自身もこうした体系や理念を中国に持ち帰り、新館建設とサービスの中に生かしていきたい。

言わずにいられないこと。図書館の参観研学以外にも、今回の訪日では日本の発展の速さ、現代化した社会の建設を目の当たりにし、日本の多くの風土や人情も深く印象に残った。今回、東京や大阪といった現代化した都市の賑わう街道や四方八方に通じている交通網だけでなく、京都や奈良のような優れた古都で日本人の知恵や想像力を見ることもできた。もちろん日程が慌ただしかったので、深く理解することはできなかったが、見聞したものは一生忘れられないと思う。中国の飛躍的発展と、日本の友人たちに再会できる機会を期待している。

上海海事大学日本語学部 主任　張恵雯

訪日感想

財団法人日本科学協会の招請を受け、われわれ一行 27 人は 2006 年 12 月 4 日～12 月 11 日に日本を訪問した。今回の訪問について以下の感想を述べたい。

1. 感謝の気持ち

日程、見学先、受入状況等訪日の内容全体に対して感謝する気持ちで一杯である。

特に、直接にわれわれを案内してくれた日本科学協会の担当者の方々との触れ合いを通じて彼らの仕事内容、人格等をよく理解した。彼ら及びヤマタネ株式会社等関係者の皆様が我々に図書を届けるためにどれだけ苦労なさったかをよく理解した。彼らは、金銭だけではなく情熱を込めて大量の肉体労働をなされ、多くの困難を乗り越えた。今回また訪日中の我々のために苦労を問わず、見学先へのアポイント、見学先へ行くコースの調査、バス、食事、ホテル、交通道具等すべての日程を細かく手配してくれた。

梶原義明日本科学協会常務理事は空港までわれわれを出迎え、見送りしてくださり、情熱溢れた挨拶をなされた。

これら全てを我々の眼に留め、心の中に留めた。皆様は自らの行動を以て日本国民の友好の気持ちをわれわれに伝え、中日間に友好の橋をかけた。

2. 訪問の内容

（1）日本財団への表敬

日本財団を表敬訪問した際、笹川陽平日本財団会長をはじめとする日本財団の皆様から熱烈な歓迎を受けた。日本財団は、日本財団と日本科学協会の関係、事業実施のプロセス、それぞれの職責等を説明してくれた。それらを通じて日本財団と日本科学協会の事業についての理解を深め、敬意が生じた。中日両国人民の友情を増進するために皆様は勤勉に仕事をしている。

我々も皆様と同様に中日両国民の友情を増進するために弛まぬ努力をしなければならない。

（2）図書館の見学

日本滞在中に、武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、国立国会図書館、琉球大学図書館を見学した。その中に私立と国立等違う種類の図書館があるがそれぞれは自らの特色を有する。見学先々の各図書館の責任者から図書館の設立時間、蔵書数と蔵書の種類、読者層、館内の人員配置と作業分担等の説明を受けた。

図書館の見学に関して次の感想があった。

①日本は図書館の整備を重視し、予算の配分も多い。図書館の建設は特色と中身があり、文化的雰囲気に満ちることを目指している。確かにそこが知識の宝庫になっているゆえんである。

②図書館員が少なく無駄を省いている。

③図書館は清潔で整然としており、それぞれの特色と優位性がある。学生や地域住民が利用しやすい。

3. 訪日印象

図書館等の見学以外に清水寺、金閣寺、東大寺、唐招提寺等日本の古代建築も見学した。これら有名な寺院には中国古代の面影が残されている。特に、唐招提寺は中国の高僧鑑真和尚を記念するために建てられた寺院である。中日友好の源流が長いことの証である。われわれの世代には中日友好を伝承し、高揚する責任と義務がある。

総じて、今回の訪日を通じて日本及び日本国民に対する理解を深めた。日本科学協会が実施している事業は意義が深く、これからも継続し高揚していくべき事業である。我々が受け取った一冊一冊の図書にはスタッフの皆様の気持ちが一杯込められ、日本国民の友情が込められているので、これらの図書を大切にしなければならない。図書を通じてきっとより多くの人々の心が開かれるだろう。

ただ一つ残念なことがあった。日本にはまだ煙を出す煙突と高圧線があることであった。環境重視という日本の印象についての唯一の不足であった。

総じて、今回の訪日を通じて日本の進歩と高効率の発展について、自らの目で確かめた。そして、日本の大学の良いところ、大学図書館が学生や地域住民になされた努力と貢献を自らの目で確かめた。更に、日本国民の友情と中日友好のために日本の国民がなされた貢献を自らの目で確かめた。

日本語の教師としてこれらの見聞を学生達に伝え、今後、学生達と共に中日友好を次の世代に伝承するために努力していきたい。

訪日のチャンスを与え、われわれを受け入れるために勤勉に仕事をしてくださったすべての人に感謝する。

2006 年 12 月 20 日

上海海事大学図書館　副館長　蒋志偉

日本の大学図書館の考察について

1. 訪日考察活動の背景

（1）　訪日考察活動の賛助機関

今回の訪日は、日本財団の助成を得て日本科学協会が実施している「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の一環として行われたものである。日本財団は古くから中日友好交流事業を行っており、中国の改革開放事業を支持する日本の民間友好団体である。1972 年中日両国が国交を回復して以降、「日本財団」はすぐに中国との友好交流を始めた。日本財団の笹川陽平会長の父親である故笹川良一氏が、戦後に競艇事業を少しずつ進め、中日国交回復後、初めて中国へ入り、笹川ファミリーの中国友好事業を展開した。故笹川良一氏は 50 億円を出資して「笹川中国友好基金」を設立し、大規模な訪日活動を何度も組織した。笹川陽平氏がその職位を継承して以降は、実用性にこだわって日中友好事業を積み上げてきた。今回、私達が日本に到着したとき、笹川陽平氏が自ら代表団を出迎えてくれた。その言行から、笹川氏は浮いたことを言わず、まじめな実務家だと感じ取れた。彼は中日友好に自分の認識やこだわりをもっており、高遠な見識を披露しながらも、ユーモアや情熱にも富んだ人物である。笹川陽平氏のような日本人が中日関係の大黒柱であり、日本人の中国人に対する気持ちの主流でもあると信じている。

日本科学協会は 1924 年に成立、文部大臣の認可を受け設立された財団法人である。協会は日本の国際的な科学や教育の協力事業を促進しており、よって平和と発展を目的とする団体の一つである。協会は中日協力の分野でも少なからぬ仕事をしている。1999 年 7 月から、日本財団の賛助を受け、「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の中国向け図書寄贈活動を展開してきた。よって、この中日大学図書館同士の交流事業でも、日本科学協会は主催者として中国国内での窓口を務めた。今回の日本財団表敬訪問時、日本科学協会の濱田隆士理事長、梶原義明常務理事も会見に出席した。彼らはいずれも中国と友好的な日本の民間人である。

今回の活動は全日空の支持も得た。全日空の英語名は All Nippon Airways（略称 ANA)、中国語名の綴りは全日本航空公司である。総合的な実力として、アジア太平洋地区および日本で全日空は第二位、日本航空に次ぐものである。全日空はこの中日友好活動プロジェクトを知ると、実際の行動によるサポートに同意し、代表団が日本で活動するために様々な便宜を図ってくれた。

（2）　中国での図書寄贈プロジェクト

今までのプロジェクトで、日本科学協会が収集し寄贈した図書は総計 151 万冊、中国でその図書を受け入れた大学はまだ 24 校である。このプロジェクトの中国での影響は始まったばかりである。これからの道のりのほうが長く、困難だというべきだろう。このプロジェクトに対しては日本側も重視しており、日本財団の支持のもと、本プロジェクトの実施と合わせ、日本語での知識コンクール「笹川杯日本知識クイズ大会」が展開された。2004 年にハルビン市で第一回大会を実施して以来、三回開催され、少なからぬ成果が上がった。同時に、図書の寄贈と「大会」というこのプロジェクトが中国への影響を拡大し始めた。中国と日本の大学のためになる、特に、大学図書館同志の交流プロジェクトについては、中日双方の努力のもとで絶えず発展していくことを心から希望している。また、日本側（日本財団および笹川氏、および本プロジェクトの実務者である日本科学協会を含む）の正しい見通しを賞賛したい。ちょうど笹川氏が日中国交 30 周年記念大会での講話（『二千年の歴史

を鑑として』と題した小冊子に再編されている）で指摘しているとおり、「日中二千年の交流の歴史を振り返ると、実に色々なことがあった。よいこともあれば、悪いこともあった。」恐らくはこの図書寄贈プロジェクトは中日間の文化教育交流活動における偉業の一つであろう。

(3) このプロジェクトにおける我が図書館の役割

上海海事大学図書館は昨年よりこのプロジェクトに参加しており、寄贈された図書を中国南方各省市の大学へ転送する任務を主体的に担っている。幸いにも日本科学協会から招待を受け、大学からも許可され、私と外語学院日本語専攻の主任である張慧雯先生の二名が代表団に参加した。2006年12月4日から11日、日本の東京、大阪、沖縄などにある四大学の図書館で考察を行った。考察の期間は長かったとは言えず、日程の手配もかなり詰まっていたが、得られたものは終生忘れ難いと思う。

このプロジェクト、この偉業に参加できたことは、疑いなく我が図書館にとって幸いだった。同時に、日本はやはり先進国であり、その大学図書館の発展は欧米諸国の水準に近い。しかも私たちと文化の上で源を同じくしており、日本の大学図書館の先進経験を学習することは、中国の大学図書館事業の発展にとって疑いなく非常に重要な意義を持つものである。

2. 日本の大学図書館全般の印象

今回の訪日団メンバーは主に図書の寄贈を受けた24大学の図書館から参加しており、日本での主な参観地点も図書館だった。日本の図書館は非常に合理的にできており、私たちが参観したとき、職業柄、非常に興味を惹かれ、自然と見るのも入念になった。私は初めて日本へ行き、初めて日本の図書館を目の当たりにし、直接日本人と交流した。新鮮さ、好奇心や第一印象、日本の都市、文化、人々そして図書館のいずれもが、いい思い出になっている。

訪問した5箇所の図書館は、主催者である日本科学協会が苦心して設計し手配したものである。武蔵工業大学図書館、芝浦工業大学図書館、成蹊大学図書館、琉球大学図書館、日本国会図書館はそれぞれに特徴があった。

武蔵工業大学図書館のような建築構造には特徴があり、日本特有の木造建築の風合いが独自だった。木造建築は少し古びて見えるものだが、この図書館はむしろモダンの息遣いに溢れており、木製家具に囲まれるだけで、学生の意欲が向上し、優雅で落ち着いている。

成蹊大学は巨大な建築構造だったが、図書館は主建築の八階にあった。この図書館の最大の特徴は透明な建築の趣で、建物の外壁全てが巨大なガラスでできているだけでなく、全体が透明で、心を開いて多くの学生を受け入れ、自らの持つ知識を余す所なく学生に伝えられることを象徴している。他に特徴的なのは、この巨大なガラス製品の中に、完全ガラス製の空間が多く作られていたことである。会議室、学習室、教室など…学生たちがこうした透明な空間で知識の交流をしているのを自らの目で見て、日本の教育について一つの視点を感じ取った。知識は透明な空間を伝わるもので、空気のようにこの奇特なビルを満たし溢れている。

琉球大学図書館は参観した中で唯一の国立大学図書館だった。伝統が感じられ、図書館のサービス理念、管理水準の高さが感じられた。図書館は完全に読者へ開放されているだけでなく、学生に多くの討論室や閲覧室を提供し、大学の成果を収蔵し提供する機能も担っている。これは情報時代の大学図書館にとって、理念が先進的でリードしているものである。

3. 日本の大学図書館の考察のまとめ

日本の図書館を参観し考察するのが今回の旅行の主な目的だった。学習と相互交流の精神に基づき、参観の前に日本科学協会の評議員である日本女子大学教授、田中功先生の提供してくれた日本の大学図書館について簡単に状況を紹介したものを真剣に拝読し、問題点や疑問点を持って訪日に参加した。日本側の手配した五図書館の参観を終え、ざっと一回り見ただけではあるが、ホストの皆さんの熱意あふれる接待を受けつつ、日本の図書館の特に優れているところ、自館の建設に参考となりそうなところを感じ取った。以下は簡単なまとめである。

(1) 管理効率のよさ

参観と交流で見られたこととして、日本の大学図書館は管理の効率が非常によく、この点で、中国の高等教育機関図書館の改革にも参考にできるところが多いと思った。日本の大学図書館は、主に以下の点で管理効率のよさが現れている。一つ目は組織がフラットで簡潔なこと。二つ目は、人員が訓練されており、責任が明確なこと。三つ目は、図書館が秩序だって整然としていたことである。

日本の大学図書館は、組織がシンプルである。中国の一般的な大学図書館では、全て館長、部門主任、館員の三層構造からなっている。しかし、日本の大学図書館には部門という括りがない。組織構造は基本的に館長（1 名）、事務長（1 名、または課長）、館員（日本の「司書」証書を所有）である。つまり、図書館の内部業務と開放サービスの二分野に分けて管理しており、構造は十分にシンプルである。日本の国会図書館は国の図書館で、国会議員へのサービスを主な任務の一つとしているが、同時に国の図書館としての責任も負っている。したがって、その組織は大学の図書館と完全に違っている。上記の大学図書館の組織モデルから見ると、日本の大学図書館はいずれもシンプルな組織構造であり、基本的には部門を設けず、専門職の人数も厳格に限られている。日本の人口が近年来減少傾向にあるため、人的資源が逼迫していることも、図書館従業員が少ない原因の一つではないだろうか。日本の大学図書館は組織構造が管理の原則に合っている。一般管理額の研究によると、原則 7-8 人が規模としては最適で、組織構造はフラットなのが最も効率的だという。この点で、日本の大学図書館は科学的管理の原則に合っている。

当然のことだ。管理の効率がよく、設備や理念の先進性といった要素だけでなく、人員全体の素養も重要な要素として挙げられる。簡単な例として、磁気ラベルがある。本の見返しに貼ってあり、誰でも分かるようになっている。中国では見えないように磁針をセットしている。本を盗む人がいないとは言わないまでも、かなり少ないのだろう。

(2) サービス理念の新しさ

私たちが参観した日本の大学図書館は、いずれも規模の大きいところではなかった。武蔵工業大学や芝浦工業大学などは中国で言うと小規模な学校にあたる。しかし、この二館という一部から全体を見ることができる。いずれにも電子閲覧室、学生討論室、教員閲覧室、会議室、視聴覚室などが設置されている。規模の大きさに関わらず日本の大学図書館は、建物がよいだけでなく、レイアウトも合理的で、相談が充実しており、学生の色々な学習ニーズを重視している。

日本の大学図書館では館員の全てが「司書」資格証書を取得しなければならない。この専門資格証書がないとその任に就けないのだ。館員は図書館情報学専攻の卒業生だけではない。他専攻の出身者のほうがより多い。したがって、図書館業務以外にも特定専門分野の知識を備えており、教員向けの学科サービスを行うこともでき

る。このため、各館は需要に基づいて専門館員（中国の学科館員に相当）を配備しており、一般にやや大きな図書館では更に 3～4 名、小さな図書館でも 1～2 名の専門館員がいる。専門館員は主に専門文献の検索補助や受け渡しに従事している。

(3) ユニークな建築

日本の大学図書館はいずれも個性に気を遣っている。特徴はそれぞれ違っており、モダン建築で表現できているものもあり、蔵書の特徴で表現できているのもある。図書館自身が特徴的であったり、大学に含まれていたりする。

武蔵工業大学の図書館は木製の内装が特徴である。図書館内の各設備は、机、椅子、書架やパーティションまでが木製である。館内設備については、木材でできるものは全てが木製なのだ。木製品の作る環境は古典的で静かな趣があり、閲覧する環境に適しており、図書館内の雰囲気が読者と特に溶け込んでいる。

芝浦工業大学図書館の館内環境は現代的である。面積は余り広くないが、館内レイアウトは非常に合理的で、広々と明るい感じがする。小さいスペースの利用が非常にうまかった。例えば閲覧スペースにアイドル区画があり、ほどよい緊張感と落ち着きが感じられる。視聴覚エリアの面積も広くはないが、10 台ほどのコンピュータが 1 つのコーナーに置いてあり、何ら文字説明がない。1 台の液晶モニタとその前に置かれたモダンできれいなソファが視聴覚エリアの目印になっている。こうしたレイアウトはとても創意に富んでいる。

成蹊大学図書館は面積が 12000 ㎡近く、全面ガラス張りで、外壁にも内部のパーティションにもガラスが用いられているという特徴的な図書館である。図書館に一歩入ると、球状のガラス空間が数多く見える。あるものは会議室、あるものは討論室のレイアウトがされており、教室や閲覧室もある。

琉球大学図書館は私たちが参観した中では伝統が感じられる建物で、本館は総合大学の、分館は医学部の図書館になっている。

まとめると、参観した日本の大学図書館はいずれも特徴がはっきりしており、一館ごとに受ける感覚が違い、それぞれの特徴を持っているのだが、注目したいのは図書館のサービス、管理と建築との融合である。

(4) 伝統と革新の優れた調和

私たちが見てきた日本の図書館は、斬新な現代的建築か、伝統を重んじた建築かに関わらず、また建設規模の大小に関わらず、明らかな特徴を備えていた。それはどの図書館でも伝統の継承と革新とが有機的に調和していたことである。例えば武蔵工業大学の図書館は木造であるが、建築の外形も館内設備も現代的なものだった。成蹊大学の図書館は建築の外形が非常に現代的だった。全てが透明なガラスなのだ。しかし、そこでも図書館の伝統は保たれており、貸出、館内閲覧、相談を主体とする伝統的なサービス体系が維持されていた。芝浦工業大学図書館、琉球大学図書館および国会図書館では、伝統的なサービスが良好に保たれていただけでなく、革新されている点もあった。

伝統の維持という観点から考えさせられたのは、主に以下の点についてである。

1) 読者の閲覧ニーズを満たすのが主

図書館は、読者の閲覧ニーズを満たすための機構であるため、ニーズに対応するには情報化につれて弱体化することはできない。逆にいっそうの強化と発展を得るべきだ。情報化時代の読書のニーズをいかに満たすかが、情報化時代へ向かう図書館の一大課題である。読者ニーズの満足を目指しての行為でも、図書館を放棄したり貶めたりする行為は全て図書館の背信行為であり、図書館

の社会紀律に背くものであるため、最終的には歴史の罰を受けることになる。この方面では、日本の大学図書館は比較的うまくやっていると言うべきだろう。それがよく現れているのは以下の項目についてである。

①書目の検索が便利

参観した図書館では、どこでもOPAC検索システムが使えた。武蔵工業大学図書館ではフロアごとの分かりやすい位置にOPAC端末を設置しており、成蹊大学図書館ではOPAC端末が16台で、データベース端末の12台を超える数である。その大学の教員は自宅や事務所で図書館の書目を検索でき、学生は寝室でも検索できる。このほかにも、図書館では大量の図書館リソースを紹介しており、読者が図書検索に利用できる。

②気配りの行き届いた読書環境

図書館は読書環境の整備についても全力を尽くしている。閲覧用の机や椅子の設計、書架からの本の取り出しやすさなど、細部に亘るまで、温かみのある人間的な方法をとっている。例えば照明、電源、ネットワークプラグ、踏み台など、実用的なだけでなく美しさもある。多くの図書館では休憩環境が読書環境と調和をもって住み分けられており、読書環境のレイアウトは多様で巧妙なものである。

2）読者主義の表現

読者に利便を図るのは図書館の伝統文化の精髄の一つである。日本の大学図書館は、施設に関わらず、読者の利便性を強烈に意識している。例えば、芝浦工業大学図書館のエレベータには、そばに必ずフロアガイドがある。武蔵工業大学の書庫では、読者が書籍検索をしやすくするため、建物の断面図がデザインされている。読者が一目で分かるようになっており、非常にシンプルである。だいたい、各図書館の読者入口には、どこでも相談カウンターを設置している。この点は欧州の図書館と基本的に同じである。

読書は本を読むという行為だけでなく、討論も非常に重要である。討論については現代西洋教育が比較的成功しているところである。したがって、日本の大学図書館には、欧米のように多くの学生学習討論室が設置されている。学習室は図書館の各フロア、各スペースに分布しており、特定の箇所に偏ってはいない。これは参考にできる点だと思う。

3）図書館伝統文化の維持

図書館の伝統文化とは何か？文化という言葉を字面から定義すると、「人類が創造した富の総和、特に、精神的な富。文学、芸術、教育、科学など」ということになる。では、図書館の伝統文化とは何かというと、図書館の誕生以来、近代図書館が生まれてから情報化が図書館に影響を与えるようになるまでの間に、図書館が読者ニーズの満足について形成してきた一種の精神を指す。この精神は読者の図書館に対するイメージとなり、図書館の人が代表する一種の理念で、精神を奮い立たせる動力の一つである。したがって、図書館の伝統文化とは、最大多数の読者のニーズを満たし、必要とされる文献資料をできる限り収集、開発、提供することだとまとめられる。こんにち、情報化が進んでいるにしても、この理念は過去のものとなってはいない。相当に長い期間は過去のものとならないだろう。この点で、日本の大学図書館はとてもよくできている。

日本の大学図書館は読者ニーズを満足する方面において、実際的に取り組んでいる。館内のいたるところに十分な数の OPAC 検索端末があるだけでなく、各種

図書館利用ガイド、合理的で分かりやすい図書館レイアウト図などが作られている。だいたい最も分かりやすい位置に相談カウンターがあり、第一線の相談係や専門職員がいる。専門の学生討論室、学習室も備えている。どの図書館へ行ってもこうしたものを見ることができるということは、この国の図書館の発展は基本的に成熟段階まで到達していることの説明である。それに比べ、中国の大学図書館ではこうした設備が整っておらず、レベルの高さを追求しようとするあまり、基礎サービスがおろそかになっている。図書館の発展は始終その基礎と切り離せるものではない。基礎とは読者のニーズを満たすことである。読者のニーズを満たすことができ、かつ大衆のニーズに対して絶えず革新していくことだけが唯一の出口であろう。

基本的ニーズを満たすと同時に、日本の図書館は図書館の発展についても追求しており、先進国の発展傾向の特徴も少なからず備えている。

1）大学図書館を開放により、社会にもサービスをしている

大学図書館の対外開放は、大学周辺の地域社会に知識の面で新しい貢献ができる。現在、多くの国公立大学図書館で対外開放が実施されている。大学図書館を一般市民に開放すると以下のメリットがある。

①大学の文化的財産を有効利用できる。

②私立大学が外部に大学設備を開放すると、文部科学省から多くの給付金を受けられる。

③大学の宣伝に有効で、大学の社会的評価を高めることができる。

私立大学図書館の対外開放について、一部の図書館では外部利用者から利用料を取っている（1 年間で約 6000 円、関西学院大学、上智大学など）。

私たちが参観した芝浦工業大学はフェンスがなく、数棟のビルでできており、守衛もいない。誰でも出入りができる。私たちには想像のつかないことである。

2）公共学習室（Ｌearning　Commons）の普及

公共学習室とは、図書館が共同学習のために提供するスペースのことで、ネットワーク時代のサービスを学習に提供する場であり、とても目を引く。「Commons」の意味は、「共有」、「共同」、「公共」である。これは 90 年代に米国の大学図書館が採用し始めた方式である。ネットワークが普及し、図書館自身の存続が難しくなるといった問題が表れ、図書館へ行く読者が減少してきたため、図書館が危機感を覚えた。こうした問題を解決するため、1992 年にアイオワ大学が図書館内に情報アーケードを設立した。南カリフォルニア大学の図書館には情報共同利用室といった名称の異なる公共空間が作られた。こうした方法の採用によって、これらの大学の図書館利用者数は上昇に転じた。これらのスペースでは、コンピュータを使用したり、グループ学習や討論したりすることができる。同時に、図書館の使用規定にもこれらのスペースでは会話を禁じないと明文化されている。

日本では、ネットワークの普及により、多くの図書館で利用者数が減少している。このような危機を意識し、日本の大学図書館や新設の図書館の中には、こうした公共空間を増設するところが多くなってきた。例えば、武蔵工業大学のメディアライブラリーや、国際キリスト教大学などでは、図書館のオープンスペースに 120 台の学習用 PC と 3 つの公共学習室、視聴覚室を備えている。これらのスペースには書架がなく、共同学習の場所として提供されている。

3）図書館の機関リポジトリー(Institutional Repository)作用を発揮し、発展の余地を確保

機関リポジトリーの概念は実際のところ、大学や各種研究機関に特有の研究成果を表現する施設の一つである。研究資料リポジトリーは大学などの学術機関がその研究成果を電子データ形式で保存し、ネットワークを通じて機関内外のシステムに送信する。具体的な方法は、教職員が学術雑誌で発表した成果などのコンテンツを図書館が収集し、大学内外の読者の利用に供するというものである。

このようなシステムは、主に大学で生み出された知識を蓄積するためのもので、誰でも無料で学術論文を閲覧できる一種の公開閲覧の理念に基づくものである。具体的な実施時、どのようにして教員に論文を登録させるかなどを含め、図書館は新しい情報収集メカニズムを作る必要がある。同時に、まだ著作権を持っている出版社にその使用手続きをする必要もある。

日本では2005年から、東京大学、千葉大学、北海道大学、早稲田大学など19大学で試行が始まっており、こうした研究資料リポジトリーシステムの運用が始まっている。これらの大学では各大学の論文、論文のプレプリント、実験データ、教材、ソフトウェアなどの学術情報を蓄積、保存し、ネットワーク経由で学内外の読者へ無償提供する試みが行われている。

上述したように、日本の大学図書館の伝統と革新はいずれも優れており、図書館の発展傾向にも合っている。現代の先進国にある大学図書館の発展モデルの一つでもある。中国全体について言うと、中国は未だに発展中の国であり、その図書館も大学と同様、発展段階にある。従って、先進国の大学図書館を参考にするのは疑いなく正しい道である。

4）アウトソーシング市場の成熟

日本の大学図書館では正規職員が少ない。労働力の逼迫や人件費の高さとかなり関係するものだが、日本は他の先進国と同様、アウトソーシング形式を採用して対応している。日本のアウトソーシング市場は割と成熟しており、専門のアウトソーサーが活躍している。図書館の人的資源問題を解決するいい方法の一つであることは疑いない。解決方法の一つが特定業務のアウトソーシングであり、もう一つが特定の職位を専門のアウトソーサーに手配させるというものである。ある大学では、全部の業務を専門会社にアウトソーシングし、人力を大幅にカットした。同時に、いくつかの職位では契約職員を採用している。そこで、彼らは専門人材会社に契約職員15名の紹介を委託した。

アウトソーシングは日本の図書館では広く採用されている。国会図書館以外の図書館は、人員編成において基本的にアウトソーシングを行っている。しかし国会図書館は国の図書館であるため、その編成は標準的なものだ。したがって、国会図書館の人員編成は膨大なものである。しかし、契約職員の使用については各館とも同様である。

4.考察した点

（1）図書館が守るべきものは何か？

情報化の衝撃により、伝統的な図書館の蔵書からサービス形式にまで変化が現れた。変化の内容によっては巨大なものや本質的なものがあるため、これらの変化に適応するプロセスの中からある発想法が出てきた。ある人はリソース

に着目し、図書館は各種メディアの情報リソースを網羅すべきだと捉えた。CD-ROM、ハードディスク、視聴覚資料などだけでなく、インターネット上のリソースも含める必要がある。ある人はサービスに着目し、情報化時代の図書館にとってのベンチマークはサービスのデジタル化とネットワーク化であると捉えた。サーチエンジンを多く持つという意味である。またある人は図書館の地位に着目し、情報化を図書館にとって初めての一大好機だと捉えた。この機会に新しい道具—検索を把握し、科学研究の前提手段にできるようにした。これらは全て、方式も使用法も優れている。いずれも図書館が情報化に適応するためのある種の変化だ。しかし、これらの効果を一面的に追求したり誇大宣伝したりするのは本末転倒になる危険がある。

図書館は結局のところインターネットではない。両者の機能、目的および社会での目的は完全に異なるものなのだ。図書館はサーチエンジンでもない。図書館機能の効用のほうが遥かに勝っている。図書館は科学研究の補助道具というだけではない。補助道具に甘んじていては図書館は植民地となってしまい、独立して存在する理由がなくなってしまう。

図書館が守るべきものは何なのだろうか？少なくとも日本の大学図書館を見ていると、図書館が誕生した社会の性状に合っていると思う。つまり読者のニーズを満たすため存在しているのだ。読書のニーズは本を読みたいという人の欲望というだけでなく、一種のシステムであり、一生のニーズに応える必要がある。近代図書館は工業化に適応するため、多くの優秀な労働力を必要とし、またその人々の素養を高める必要をも生んできた。情報化時代の図書館でも、読者のニーズを満足するという本質には変化はない。形式が変わっただけである。従って、図書館は読者のニーズを満たすためのサービスを守り、それに全力を尽くすべきである。

(2) 図書館の発展する前途は？

次に思い当たった問題は、情報化時代、図書館の発展する前途はどのようなものか？ということだ。ここではデジタル図書館と伝統的な図書館の比較やその複合型については述べていない。しかも、図書館は情報技術の衝撃を受け、その社会に対する責任にも根本的な変化が起きた。それは図書館の存続するベースである。日本の図書館に対する考察と、去年の北欧で行った大学図書館の考察から、これらの図書館は建築構造からサービス内容まで、驚くべき変化というものはなかった。もしかすると中国国内の情報技術が、これらと比べそれほど劣っていないのかもしれないし、新しいものを多く求めすぎたので満足できなかったせいかもしれない。要するに、彼らはやはり教員や学生の読者のニーズを満たすべくまじめにこつこつと努力しているのだ。ただ、私たちの見た欧米や日本の図書館は、情報技術の発展に対する適応の面で非常に優れている。話を三つにまとめると、一つにはリソースの共有が成熟していること、また、ネットワーク利用のできないところがないこと、さらに、新しいものを求めながらも実務的であることである。

リソースの共有はかなり成熟している。取り組みも早く、形式も多い。図書館同士の相互利用、ネットワーク共有(OCLC)など、まだまだある。ネットワーク利用のできないところがない。ネットワークを利用して、図書館同士の相互利用、リソース共有、OPAC 検索、文献の取り寄せ、発送サービス、ネットでの問い合わせや貸出手続などが実現されている。サーチエンジンと競合している

わけではなく、協力方式をとっている。専門の研究はせず、検索業務に徹している。

新しいものを求めながらも実務的である。空間や情報、ネットワークを含む図書館のリソースを十分に利用し、読者のニーズに供している。情報共有スペースもうまく運用されている。リポジトリなど、図書館と性質が近く、図書館の発展や地位の向上に役立つ業務を積極的に担っている。

(3) 私たちが今すべきことは何か？

ここまで国外の図書館を考察してきた情報を見ると、図書館が実践する必要のあることがらは主に以下のようにまとめられる。

1) ネットワーク、デジタル資源を十分に利用し、図書館のサービス能力と水準を向上させ、増大し変化しつつある読者のニーズを満足すること。
2) 図書館の空間、蔵書、ネットワーク資源を十分に利用し、読者が図書館の共有スペースを自由に利用できるようにすること。
3) 大学の真のリソースセンターとなることを目指し、購入した各種リソースだけでなく、大学の教職員による各種研究、教育などの成果を保存、開発し利用に供することにも気を配る必要があること。
4) 外界との連携を積極的に検討し、リソースの共有を実現すること。ここでいう共有リソースには、蔵書、ネットワーク、人力など各種のリソースを含む。

上記をまとめると、日本の大学図書館は先進国の大学図書館として捉えられ、その発展の特徴は先進国の図書館のそれと一致している。今回の日本の図書館の考察旅行は充実したものだったと言える。多くのものを見ることができ、参考や考察に値するものも多かった。中国国内の図書館は改革開放以降、大いに発展した。私たちと先進国の図書館との交流も日を追って増えてきている。しかし、やはり中国は発展中の国であり、他国の今日は私たちの明日かもしれない。従って、学習は回り道を避けたり少なくしたりする重要な手段でありうる。毎回の国外視察や学習は言葉にしがたい感嘆だけではない。私はそこで見てきたものを真剣に大衆へ公開するが、重視に値するものにしたいと願っている。(2006 年 12 月 12 日　火曜日)

寧波大学図書館　副館長　黄旭昇

訪日随想録

日本科学協会の招請を受けて 2006 年 12 月 4 日～11 日にかけて「第 4 回中国大学図書館担当者訪日団」とともに日本財団と日本科学協会を訪問し、笹川陽平日本財団会長、濱田隆士日本科学協会理事長を表敬訪問した。そして武蔵工業大学、芝浦工業大学、成蹊大学、琉球大学の図書館、国立国会図書館を視察し、図書館の業務管理、図書館資源の活用、館舎の建築等について交流を行った。日本滞在中に横浜にある「教育・研究図書有効活用プロジェクト」の協力会社である株式会社ヤマタネを視察した。その他に皇居、沖縄の琉球王国の遺跡と海洋公園、大阪の天守閣、京都の清水寺と金閣寺、奈良の東大寺と唐招堤寺を見学した。今回の訪問を通じて日本の真実が見えた。

短い数日間に時空を旅したような感じがした。思いは唐の時代に遡った。唐天宝元年(742 年)に、日本の学問増栄叡、普照は大明寺に来て「東遊興化」のための受戒僧 1 名を推薦するよう要請した。当時既に 55 歳となっていた鑒真和尚は、思托等と共に前後 6 回日本へ渡ろうとしたが、うち 5 回は失敗した。鑒真は第 5 回の東渡の途中において失明してしまった。天宝 12 年 11 月 16 日、鑒真は普照、法進、昙静、思托、義静、法載ら 24 人と共に第 6 回目の東渡を図った。1 ヶ月かけてとうとう 12 月 20 日に日本の阿多郡秋妻屋浦に到着した。延慶師は鑒真和尚を大宰府に案内した。翌年 2 月、鑒真一行は入京（奈良）し、東大寺に居を置いて聖武天皇、皇太後、孝謙天皇、皇太子等に授戒した。その後更に沙弥澄修ら 440 余人に授戒した。旧戒を廃した旧大僧霊福、道縁、忍基ら 80 余人に改めて授戒した。日本の仏教界においてはじめての授戒となった。唐乾元 2 年(759)鑒真和尚は弟子の普照、思托らを率いて奈良で招提寺を建設し、その後招提寺に居を移した。鑒真は戒律を弘揚した以外に中国の建築、彫刻、医薬等も日本に紹介し、中日の文化交流に卓越な貢献をなされた。

日本はその独特な地理条件と悠久な歴史を以て独特な風格を有する日本文化を育んだ。中日両国は文化交流と経済発展等の分野において総合依存の関係にあり、時には戦う時期もある。ここ 100 年近くの中日間系は確かに紆余曲折であった。しかし今日の日本社会、特に日本の友人達が中日友好を促進するためになされた努力を思い、故笹川良一先生の三男、現日本財団会長笹川陽平先生の言葉を思い出す。「悟りは早晩あり、友好に前後なし」。笹川陽平先生は浮辞を言わず、実務に執着している。父親の志を受け継いで 1985 年以来、中国を 50 回以上訪問し、200 以上の事業を実施した。

京都の清水寺からは日本建築の堂々さが見えた。古代日本人の智慧は全世界の人々を敬服させた。奈良の東大寺において聡明な一休は日本人に新しい勇気と叡智を与えた。唐招提寺の高僧鑒真は中国人民に改めて寛大と非凡を与えた。「歴史を鑑として未来に向ける」。中日友好は、中国の経済と文化発展、そしてアジア乃至世界平和にとって深遠な意義を持つことである。笹川陽平先生が言われたように 2000 年の歴史を鑑とすれば、日本国民、中国国民にとって最も理性的になり、更に未来に向けられる。中国と日本はきっとより友好的になれることを確信している。

2006 年 12 月 26 日

貴州大学外国語学院　助教授　邢小敏

今回の訪日で得られたものは多く、とりわけ日本の大学図書館の現状については比較的よく理解できました。日本の大学図書館は、国立大学図書館、公立大学図書館、私立大学図書館の三種類に大別できます。日本の大学図書館にはとても特色があり、今回の訪問で特に深く印象に残ったのは以下の点です。

1．図書館の独特な建物

今回、私たちが参観した図書館は 4 箇所ですが、各図書館の建築様式はそれぞれ独特で、特に球体図書館が深く印象に残りました。お洒落でエキゾチックで格調高いデザインでした。その次に来るのは木造の図書館です。木造の図書館は球体の図書館ほどエキゾチックではありませんが、十分に古風で高尚な感じがし、こうした図書館で本を読むと博学に見えます。しかし、最もユニークだったのは椅子の図書館です。館内の椅子が色々なデザインでとても快適だったのですが、安からぬ品々で、この快適で上品な椅子に座った感覚は帰ることを忘れさせました。

2．日本の図書館管理方法

日本の図書館管理は、非常に科学的で、図書館全体の専従職員は僅か数名、多くの業務が民間に委託されているのが、非常に科学的な管理法だと思いました。経費の節約にもなり、人員が定員を超える心配もありません。

3．図書館ネットワーク

日本の大学図書館ネットワークにはすべての蔵書が載っており、ネットワーク上のディレクトリに登録された図書がネットワーク経由で相互に利用できます。

4．公共学習室

日本の大学図書館はどこでも公共学習スペースを提供しており、ネットワーク時代のサービスを学習の場所に提供していることは、広く知られています。ネットワークの普及により、日本では図書館自身の存続問題が現れました。図書館の読者が日を追って減少したので、利用者数を回復させるため、日本の図書館ではこうしたスペースを設け、しかもスペースにはコンピュータを設置して、読者がグループ学習や討論をできるようにしたのです。

5．大学図書館の開放

日本の大学図書館は外部に解放されています。大学図書館の市民への開放には以下の長所があります。

⑴　大学の文化的財産を有効利用できる。
⑵　大学を対外的に宣伝でき、大学の社会における知名度を向上できる。
⑶　大学周辺地区の知識に新たな貢献ができる。

6. 日本科学協会が収集する図書のありがたさ

今回の訪問で、私たちは日本科学協会の寄贈図書の保管倉庫を参観しました。私は日本科学協会の全ての図書寄贈、受け入れの過程を全面的に理解し、協会が送ってくれる本のありがたみ、更に寄贈図書の大切さを感じました。帰国後にはいただいた図書をきちんと整理し、貴州大学の教員や学生へのサービス、貴州大学と日本との文化交流サービス、貴州の経済発展に早く貢献ができるようにし、日本科学協会が私たち貴州省の住民のためにしてくれた全てへの感謝にしたいと決心しました。

広西師範大学図書館副館長　閻其春

日本を訪問しての印象

1100 年来、中国といろいろと複雑な関係にあり、一衣帯水の友好的な隣国である日本に対し、これまで本や噂話、テレビやネットから支離滅裂で断片的な印象しか得ておらず、自分でもよく知っているつもりでも、かなり未知の部分の多い隣国だと思っていました。

2006 年 12 月上旬、幸いにも日本科学協会に招待していただき、自身が八日間の訪日交流活動を体験することができました。

時間は短く、掠めるように東京、横浜、沖縄、京都そして奈良を慌しく回り、表面だけをざっと見るだけで、トンボが水を打つように深入りできず、全面的にも細かくも見られませんでしたが、かつての無味乾燥で字ばかり並んだ平面的な感覚とは違い、初めて生き生きとして面白い、明瞭な理解や体験ができ、対象についての学習にはそれ程「彩り」はなかったものの、はっきりと記憶している日本の印象がいくつかあります。

＊印象その１

日本の都市は一般的に物や車が溢れており、建物も建て込んでいる。電線や電話線の地下化は完全ではないものの、環境、通り、公共施設など全体にとても清潔で爽やかでした。

広大に高くそびえる建物から景観的に緻密で精巧な店舗、民家に至るまで、物が散らかっていたり張り紙や落書きがあったりという光景は、基本的に見当たりませんでした。私たちが訪れた数都市では、通りは必ずしも広々としてはいませんでしたが、路面、施設、車両、自動販売機はどこでも清潔で、道路標示もはっきりしており、雨の日でも汚水が脇に流れて行くのがはっきりと見える状態で、道端にいくらか掃除されていない落ち葉が見えた他には吸殻なども無く、まして商店の室内、ホールなどの整った清潔さは言うに及ばず、ごみも分別して捨てられていました。沿道にある小さな普通の民家でも、植えてある木や花は全てきれいに剪定されており、不要物はきれいに並べられており、塀も新品のように清潔でした。

道中、大阪で道沿いに廃棄物処理場が見えたのですが、プレス機の前以外では、くず鉄や廃プラスチックなどの廃棄物などが、いずれもきちんと整えて積み上げてありました。奈良の唐招提寺付近と往来の路上では、少なからぬ水田や農家を目にしましたが、同様にみな整っており清潔で、それなりに秩序があり、田んぼのすぐそばの道路を車が往来しても、黄砂や土埃が舞い上がる様子はありませんでした。

これは多分、日本政府が環境保護を重視しており、国民が生活環境を大事にしていて、ひとりひとりが環境を守るという自覚を持っている結果なのでしょう。ここまで

することは本当に大変でしょう。思わず感心し、うらやましく感じました。

＊印象その２

日本の数都市で或いはその間の移動中に見たり触れたりした日常のことで、小さいことではありますが、日本人は規則や時間を良く守っていると思いました。だから、日本人の仕事生活には秩序があり、高い効率を追求するための重要な保障となっているのでしょうか。

上海の浦東空港から東京の成田空港へと飛んだ初日、空港ロビーから駐車場に出る時、道路を横断しなければなりませんでした。慣れた中国国内でなら、まず間違いなく横断歩道の白線に立って、おどおどと左右を見回してから思い切って渡ったものです。しかし、驚いたことに、日本のドライバーは信号も警察の監視もないのに、渡ろうとする人がいると、自主的に横断歩道の手前 5、6 メートルのところでゆっくりと車を止め、歩行者を先に通していました。横切ろうとする歩行者が 20～30 人おり、皆がスーツケースを引いて長い列を作っているのは分かったでしょうに、広いフロントガラス越しに見えたのは、ドライバーも乗客もおとなしく歩行者の通過を待っている姿で、いらついているような表情も挙動も見られませんでした。（参考までに、中国国内の大多数は次のようなものです。きちんと横断歩道を渡っていて信号が青の時でも、警察が居合わさなければ、横切る時は戦々恐々とドライバーの目の色を伺い、時には避けたり時には慌てて逃げたりしなければなりません）。その後の数日間、日本の数都市を歩く際には気を付けて見てみましたが、中国のような様子はなく、車や自転車の人は誰でも歩行者に道を譲り、弱者を優先していました。

当然、日本の歩行者も同じように交通規則を遵守しています。信号が赤になれば、車が走っていなくても、信号を無視して無理に渡る歩行者はいませんでした。誰もが青信号を待っていたのです。面白いのは、人出が多い商店街の道路や軒先を横切る時、圧倒的多数の通行人が交差や割り込みをせず、一塊になってそれぞれ自発的に道の片側を歩き、混雑や衝突を避けているので、誰もが早く歩くことができたということです。

車に乗って通行してみると、どこででも車は車線を並んで走っており、濫りに割り込んだり車線変更をしたりして混乱を招く車はありませんでした。だからこそ、車が多く道も狭いのに、交通の流れが順調であり、小一時間全く動けないなどというような渋滞に遭わずに済んだのです。警察の人も殆ど立っていないようでした。日本で過ごした 8 日間を振り返ってみて、行った町で見かけた警官をひとりひとり数えてみても、二桁といませんでした（当然、国会付近と領事館界隈では見かけましたが。）

日本人はまた、とても良く時間を守ります。訪問した団体、施設ではどこでも全行程のスケジュール表を持っており（実際は計算していたのかもしれませんが）、訪問する側も受け入れる側もそれを厳格に守っていました。事前に決められたスケジュー

ル表と実際の訪問イベント完了のプロセスを比較すると、だいたい十数分ぐらいの差に抑えられており、厳格に時間を守って正確にスケジュールをこなせるとは、賞賛に値する印象の深さです。

交通規則を守る、時間を正確に把握するなどといった平常のことがらから、日本人が決まりを守る厳格さを窺うことができました。こうした気風は短い時間で培えるものではないと思います。

＊印象その３

日本人は真面目で、細かいところも重視し、仕事熱心で、仕事はストレスのかかるものが多く、残業も普通にこなしています。

東京に着いた時、成田空港から宿泊先がある池袋に車で移動していると、夜が近づき、空も暗くなってきているのに、鉄筋コンクリートのジャングルのような高層ビルの間を通ると、大きなガラス窓のオフィスが沢山くっきりと見えました。定時はとっくに過ぎているのに、中は依然として明かりが点いており、忙しそうでした。それがどこも残業中のためだと知って驚きました。日本のサラリーマンの多くは年がら年中こんな感じのようで、それから数日間もこういう壮観な眺めが見られました。本当にすごい眺めです。効率については言うまでもありませんが、仕事のストレスが感じられ、もしや…と思いました。日本は国土が狭く資源も少ないので、人的資源に頼るしかなく、熱心に仕事に精を出さなければならないのでしょうか。残業までして、ようやく発展に不足している条件を補うことができ、経済大国にまでなったのでしょうか。

それから数日間の参観でも、日本人が非常に真面目で細かいというところを見つけました。参観先に着いて車を降りる時間になる度、高々1～2 時間なのに、受け入れ側のスケジュールが詳細に２～3 枚の紙にプリントアウトされていて、受け入れ側の担当者の分担明細がきれいに分かり、それが真面目に細かく考慮されレイアウトされたものであることを窺うことができました。私たちに車を出してくれたドライバーも、年上に見える人もいたのですが、ひどく重い何十個ものスーツケースを順番にトランクへ出し入れしてくれました。職責のあるところは責任を持つという仕事熱心さは賞賛したくなります。

特筆に値するのは、田中功先生のことです。もともと「日本の大学図書館の現状」というテーマで講義をしてくれる予定だった田中先生は早くから資料の準備をしていたのですが、私たちが日本に着いてから彼といろいろ話しているうち、内容を補充する必要が出てきました。二日目には使う必要があり、時間は迫っているなかで、田中先生はその晩に残業までして紹介資料を更新してくれたのです。予想外のことが重なって二日目の田中先生の講義を受けることはできなくなってしまったのですが、彼が残業までして資料を用意してくれたことを知り、とても感動しました。田中先生の姿勢から、日本人の真面目さと責任感の強さ、仕事熱心な態度が見て取れました。

＊印象その４

数日間の訪問による触れ合いで時々感じたのは、日本人がとても礼儀を重んじるということです。人とはいつも品よく礼儀正しく接し、控えめに自分を抑えており、辺りを憚らない態度はほとんど見られませんでした。

私たちが目的地を訪問する度、どこでもホストは礼儀正しく親切に受け入れてくれました。送り迎えをするときの優しい笑顔と周到な手配はとても深く印象に残っています。日本訪問中、温かく受け入れられていた原因は、ただ単に私たちの身分が訪問客だというだけではありません。買い物をする商店内でも、滞在先のホテルのエレベータでも、大学のキャンパス、図書館の中などでも、日本人は人と会うと頭を下げていました。私たちの出会った日本人は、誰もが上品で礼儀正しく、素晴らしいと感じました。日本社会では、常日頃こんなにも人々が互いを尊重しあい、礼儀正しく付き合っているのですね。

＊印象その５

日本の料理も、とても特徴的でした。

日本に行く前に日本料理について聞いていたこととは、味が薄くて量が少なく、魚や牛の肉を生で食べるが、独特な風味であるというものでした。日本で試してみると、実際はとても良い感じでした。

日本料理そのものは薄味で、油物も多くありません。しかし、調味料や醤油は少なからず使われており、適切な味付けでした。食べ物のボリュームも見た感じでは多くありませんでしたが、一通り食べるとだいたい満腹になりました。しかも、栄養のバランスがとれており、牛肉と刺身は生で食べましたが、想像したような生臭さはなく、調味料をつけると、素晴らしい風味でした。食事は基本的に一人一膳ずつに分けられていますが、こうした習慣は衛生、食べ物と食器との色調の取り合わせ、造詣や置き方にまで気が配られていることによるものです。普通の弁当でさえ、かなり緻密に盛り付けられていました。

正式な日本料理には更にこだわりがあるそうですが、日本料理はとても特徴的で、名声も人気もかなりのものがあります。

＊印象その６

日本にいる期間中、五箇所の図書館を割と詳しく参観し、理解することができました。そのうちの四箇所は大学図書館です。各館それぞれに特色があり、私たちは今回の訪問で最も長い時間を費やしました。参観して理解した全体的な感覚をまとめると、中国国内の図書館とあまり一致しないところが六点ありました。

① 各図書館は特色ある建物づくりを重視しており、ここへの投資や尽力は少なくな

かったことが見て取れました。

② 各館とも読者サービスを重視しており、人を基本とする姿勢を重んじていました。多くの面でひとりひとりの利用者が便利に快適に効率的に館内機能や施設を使えるよう考慮されており、使い易いものでした。

③ ほとんどの図書館は建物と内装、機能配置がどれも特徴的で、整っていて美しく、巧妙な中に異なる芸術的風格を醸し出しており、図書館を従来の伝統が刻まれた板のような単一さから耳目一新し、多くの面で賞賛と参考に値すると思います

④ 現代科学の手法や設備を導入し応用することにより、図書館がより良く機能し業務効率も高くなっていました。

⑤ 各館の図書館員は多くないものの分業が明確で、それぞれ担当職務があり、仕事熱心なようでした。利用者も協力的で自発的に規則を守り、正しく蔵書や施設を利用していました。

⑥ 機能を拡張している図書館が一部ありました。例えば、多目的会議室、学内の教員や学生のためのディスカッションルーム、学内の作品の陳列ロビー（室）など。

まとめると、図書館の同業者として参観して感じたのは、多くの方面や細かいところが考慮や参考に値するということでした。今後の自身の仕事に関して、考え方の指針になると思います。

ここまで、思いつくままに取りとめも無く数点の印象を書き連ねてきました。

今回の日本訪問は慌しく、限られた時間と選択の中、あまり多くの都市を歩くことはできませんでした。残った印象も完全に細かく述べることはできませんが、例えば、江戸時代の大阪城天守閣。風景も環境も優美で静かな古刹。寒い早朝にランドセルを背負って、朝日を迎えながら半ズボンの制服で登校する小学生。京都に行くと、それまでアニメでしか見られなかった「一休さん」、「ドラえもん」が、日本の風格を色濃く漂わせる古民家や路地が身近にありました。東京湾の美しい夜景、ネオンライト。沖縄の水族館の巨大で透明なガラスのアクアルーム。恩納村の果てしなく広く魅惑的な海岸、海風、波浪、砂浜。これらが深く記憶に残り、とても忘れがたいものになっています。

もちろん、日本には、私のこうした視線だけでなく、私たちの意に沿わないところも少なからずあったでしょうが、特に気がつかなかっただけだと思います。

結論として、限られた時間で日本を見尽くすのは望むべくもなく、見抜くことも無理でしょうが、見れば印象はありますし、見るということは知るということ、ものを知るなどということは、だいたいこうした印象から始まるものでしょう。

2007 年 3 月か 4 月の桜の咲く季節に、中国中央電視台が日本に取材班を派遣し、『岩松看日本』という特集番組を作るそうです。私も早く見られることを期待しています。この番組で日本に注目し、より良く日本を理解したいと思っています。

この場をお借りして、大変な業務にあたっている日本科学協会の図書プロジェクト室

担当者各位に深く感謝を申し上げます。私たちの訪問を受け入れてくださった関係者各位、本当にありがとうございました。

2006.12.26